

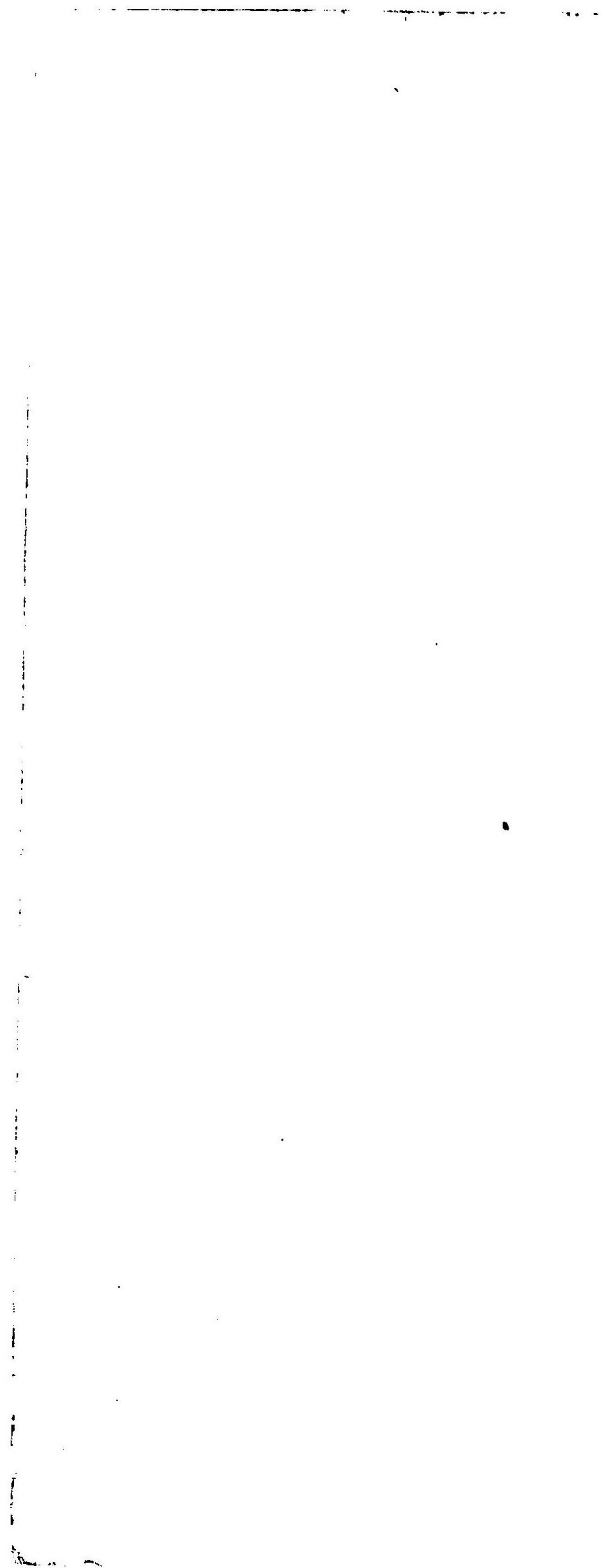
172  
3  
135

貞戒道中倣六

~~近近  
杉杉  
加半  
作~~

美









吉野  
宗

今光



持10  
605

伊賀越道中雙六

○第一 鶴が岡の段

作者 近松半二



大權聖者の未來記に書記したる四海の治亂元弘の戦ひ一統  
 めたる足利氏草もゆるがぬ鎌倉山頭の大永元年二月上旬鶴が岡の奉  
 幣ふ勅使下着の知らせよつて山の内の執權上杉顯定警衛の役目承  
 り坂本は假屋をえつらい一日かひりの家中の守護和田行家が一子志  
 津馬威義嚴重と守り居る折節佐々木丹右衛門非番の姿上取て下を憐  
 む物三重侍假屋は來かたり志津馬殿當日のお役目苦勞と挨拶し別  
 今日勅使の日のなれば取分て大切の番随分鹿末のない様  
 よ、こすも此丹右衛門貴殿の親父行家殿は劍術の門弟是迄外の弟子よ  
 りも格別な差圖下されし師匠の恩山よりも高ければ其は子息の  
 志津馬殿次第立身も有様と神も心願を込奉り祈る程の拙者が心底

伊賀越

一



日頃から齒又絹着せずを、必氣よのさへられな、貴殿の疵の酒参る  
 ど万事を忘れさつてやる、色と酒をバ敵とせよとの賢者の禁しめ、常  
 此義をお忘れ有と眞實あまる異見也、忝いおまめし、兼親共が  
 又も、劍術の高弟といひ、若けれ共實義有丹右衛門殿、兄弟同前、万端を  
 相談致せと付置れたれば、其元様を兄と思ふて居まする、そふ請て  
 下され、拙者の何より甚祝着、弟子傍輩の事をやないか、いなれども、氣  
 の救されぬ男、澤井股五郎、彼が從弟城五郎、鎌倉殿の昵近衆直人を  
 一家又持たど鼻又かけ、此前の勤も疎よして、晝夜遊所又入込由、必彼を  
 友よなされな、昨日の拙者が番、今日の非番なれ共内證ながら、見廻りも  
 致さふと存じて推參致した、勅使のお入又間も有まじ、別當へ參て配膳  
 の、勝手の案内見て參らふ、後刻くと別れ行、折からうそくと來かゝる  
 町人、番人聲かけ、くどこへ行、飯屋の前、すさりおらふと口よ、囁付

られて犬つくばい、私切通しの町人、本庄屋定七と申して、和田の  
 お家へお出入の者、志津馬様又用事有てと、聞より志津馬、苦しうない、是  
 へ參れど傍近く、今日の勅使は入の社内故、一人を改る、急用か、何事ぞ、  
 別義でもござりませぬ、彼金子の義を、家來共、其方共の南門  
 へ參つて人を通すな、残らずいけと追やれば、いか様金銀の事の内證、  
 爰で申の不調法、契約の日が延引すれば無理と思ひぬ、此事の股  
 五郎殿を頼んで置た、一兩日猶豫を頼と、咄し半へ大小も、金拵へのつか  
 つかど、入來る澤井股五郎人を、非又見るのさ、ぱり顔、定七、お手前が來  
 た筋、股五郎が吞込で、おる部屋住の志津馬殿、吉原通ひの内證金、今用  
 立て置たれば、兼てお身が願ふておる、お國の掛屋又仕てやるさ、時又志  
 津馬頼が有、身が懇意とする町人の女房、今日勅使のお入を聞て、都人の  
 裝束姿拜見させて下されと、據なく願ふ又付、裏門からつそりと、最前



社内へ入て置た、爰に粹な貴殿なれば、大目に見てくれまいか、とふじや  
 〱、町人たる者、殊に女、左様の事を政道する志津馬が役目、外の者  
 の見ゆ中、一時も早く追歸されよ、と堅ふ云た物、或やあいわい、  
 貴様の好の女だ、い、ちよとよい女房見たがよい器量、とてん天人  
 姿天降してお目よかけふ、爰迄や、と手招きよ下来る坂の段かつき、  
 屋敷か町と三重の帯、堅ふ見せても、えとけなく、志津馬様わしじや、い  
 など、被を取、松葉屋の、瀬川、或やあいかと志津馬が、胸、股五郎の  
 粹でないか、何か一日逢ね、百日と、吸付合ふておる中、身共との違ふ  
 て親持の身分、此間、御前勤、間がなふて、廊へ來ぬを女氣で、若や心替  
 りかと案じるが可愛さ、又手工合してけふの參會、よもや腹も立まいが、  
 〱太夫嬉しいか、遠慮なし、まげれ、と、突やられて、ひんとすね、  
 女中法度の此、お飯屋追いあせと、おつまやつた、い、よく、わたしがお

嫌ひぞふなど、思ひせぶりの雪の梅解ぬまかけが、それしやなり、と、  
 でないけれど、是の又きつい所へ、運て來た、は門の誰が通したぞ、此實  
 内めでござります、は門を通した、儂か、よつくいやつ、どのいふ物  
 のおれも顔が見たかつた、と、ふからそふ砕ければ、よい堅い顔が氣よ  
 くのぬ、家來共の散て仕廻ふた、實内の志津馬の腰付、廊の供する、粹奴こ  
 ふ寄た所、のんと、廓の座敷も成た、太夫主のおもたせ、是へ、と返事、奴  
 の遣手、赫繪の提重、角樽の股様、の、見舞、吉彌、た、こ、と、跡引、長烟管  
 包、ほどいて取出す、裾姿立木の櫻、あたり、ま、バ、ゆ、く、見、へ、ま、ける、先、一、獻、と  
 股五郎大盃引受て、志津馬慮外、今日の大禁酒じや、といふて、あの  
 君が顔見て、吞す、の、居、れ、ま、い、ち、よ、つ、と、一、の、身、の、養生、吞、バ、甘、露、の、菊  
 の酒、其、盃、定、七、差、召、れ、大、事、な、い、一、吞、や、れ、扱、盃、を、差、て、置、て、お、手、前、又、頼  
 事、別、義、で、な、い、此、瀬、川、と、此、通、り、又、深、ふ、云、か、の、し、た、中、所、又、去、大、家、か、ら



身請の相談、向ふの千兩二千兩惜まぬ家柄、欲は喰付親方が其方へやらふといふを先約なれば志津馬が方へ、五百兩で身受さすると、此股五郎がつまばつて置たれど、けふ翌日追つた日切、これ迄取かへも有上なれば、用立てくれまいか、そりやはやあなの方のお頼いかよもと申たけれど、部屋住の志津馬様、儘な引當がなければ、夫も思案仕て置た、和田家の重寶、正宗の名作を質物と差入る、是程儘な引當のない、股五郎殿、其刀の先祖を傳つて、常の差料の致さぬ重寶質物と入る事、扱悪い合點、其大切な刀じやよよつて書入て問は合すのさ、金さへ濟せばさよじのない、殊に此度武將の若君は元腹の祝儀、諸大名の名作の刃、献上有べき折から、正宗多き中よも和田の正宗の勝れて無双の名作、殿方は所望有の必定、其時よなければならぬ大事の刀、しづらくの用よ立、其中よの股五郎が工面して取返す、氣遣ひせずと、志津馬、其趣一札

書てお渡しなされと、色よ付入正宗を、仕てやる心の刃と、白紙取て認る、若氣の思案、是非もなき、定七證文懐中し、そんなら金子調達致し、股様方迄持参致さふ質物の結構なれど、所詮こつちの物よのならぬ、返濟の違ひぬ様よ、氣遣ひするな、身が一門の歴、金銀澤井が吞込だ、よござりますすが、云ぬ事の開へぬ、利銀の二割三月おどりてござりますと、欲の鵬股五郎よ、詞番ふて立歸る、祝ふて是から祝言、天下晴ての志津馬が奥方、目出たい、打て置しやん、調子よ、乗て最一、大事か二つも三つもいつの間よ、酔が廻つて役目の大事、忘れるめれんよ、仕てやつたど、笑壺よ入たる、股五郎、仲人の酔の紛れ、積る咄しをゆるり、瀬川、暫く粹を通そふと、跡よ難義を掛作、廊下へぬけて行共、えらぶ、股主、どれへござつた、ぬけそ、どの手が悪い、人をころりと殺して置て、逃ふどの卑怯者、此様な嬉しい中よ、殺すの死のと氣よかゝる事計、そんな



らふれと祝言するが、そなたの眞實嬉しいか、と有<sup>あ</sup>我<sup>われ</sup>等も千萬祝<sup>しちやう</sup>着<sup>やく</sup>此  
 悦<sup>え</sup>び又<sup>また</sup>一つ、<sup>す</sup>其<sup>その</sup>様<sup>よう</sup>は酒<sup>さけ</sup>上<sup>の上</sup>つたらは用<sup>もち</sup>とやらの害<sup>がい</sup>なるも此  
 盃<sup>さかづき</sup>の止<sup>と</sup>めせふ、止<sup>と</sup>めせふとの祝言<sup>しゆげん</sup>がいか、いやでなくば一<sup>いつ</sup>献<sup>けん</sup>たとへ  
 知行<sup>ちぎやう</sup>召<sup>め</sup>上<sup>の上</sup>られ、ふちの瀬川<sup>せがわ</sup>も成<sup>なり</sup>とても二人<sup>ふたり</sup>手<sup>て</sup>を引<sup>ひ</sup>合<sup>あ</sup>ふて、どんな川  
 へも志津馬<sup>しづま</sup>の本望<sup>ほんぼう</sup>も、う主<sup>ぬし</sup>も親<sup>おや</sup>も入<sup>い</sup>ぬ殺<sup>ころ</sup>せ〜と酔<sup>よ</sup>狂<sup>きやう</sup>も物<sup>もの</sup>がいのする、  
 くだ枕<sup>まくら</sup>、膝<sup>ひざ</sup>もたわいもなき折<sup>し</sup>から、勅使<sup>ちうし</sup>のお入<sup>い</sup>と呼<sup>よ</sup>べる聲<sup>こゑ</sup>、聞<sup>き</sup>とひとしく  
 丹右衛門<sup>たんゑもん</sup>、志津馬<sup>しづま</sup>のいかよどかけ付<sup>つ</sup>れば、南無<sup>なんぶ</sup>三寶<sup>さんぼう</sup>例<sup>れい</sup>の沉醉<sup>せんざい</sup>、志津馬<sup>しづま</sup>殿  
 く、コレナ 太夫<sup>たふ</sup>を待<sup>まち</sup>して置<sup>お</sup>てあの様<sup>よう</sup>も寝<sup>ね</sup>てじやないな、こそくりおこ  
 そと二人<sup>ふたり</sup>して、抱<sup>か</sup>起<sup>おこ</sup>しても、どろ〜目<sup>め</sup>、志津馬<sup>しづま</sup>、正氣<sup>せいぎ</sup>を付<sup>つ</sup>やれ勅使<sup>ちうし</sup>のお  
 入<sup>い</sup>じや、猪口<sup>ちぐち</sup>の嫌<sup>きら</sup>ひ、こつぷで致<sup>いた</sup>さふ、何<sup>なに</sup>いふても死人<sup>しにん</sup>同前<sup>どうぜん</sup>、一世<sup>いっせい</sup>の浮  
 沈<sup>うせう</sup>何<sup>なに</sup>とせん、家來<sup>けらい</sup>共<sup>とも</sup>此<sup>この</sup>女裏門<sup>にょりもん</sup>から追<sup>お</sup>かへせと、替<sup>か</sup>上下<sup>じやうげ</sup>の肩衣<sup>かたぎ</sup>を身<sup>み</sup>も引<sup>ひ</sup>か  
 けて志津馬<sup>しづま</sup>が代<sup>しろ</sup>り勅使<sup>ちうし</sup>を、出迎<sup>いであむ</sup>ふ深切<sup>しんせつ</sup>も夢<sup>ゆめ</sup>も白川<sup>しらかわ</sup>高野<sup>たかの</sup>、松吹風<sup>まつふきかぜ</sup>も音添<sup>ねぞえ</sup>

て、後の難義<sup>なんぎ</sup>と和田<sup>わだ</sup>の家世<sup>けせい</sup>の成行<sup>なりゆき</sup>こそ、定めなや

○第二 行家屋敷の段

春<sup>はる</sup>毎<sup>ごと</sup>よ、詠<sup>よみ</sup>めい<sup>の</sup>飽<sup>あ</sup>ぬ鎌倉山<sup>かまくらやま</sup>、仁義<sup>にぎぎ</sup>を守る武士<sup>ぶし</sup>も、且<sup>かつ</sup>も隠<sup>かく</sup>す桐<sup>とう</sup>が谷<sup>や</sup>、和田<sup>わだ</sup>行家<sup>けいけ</sup>  
 が一<sup>ひと</sup>搆<sup>たが</sup>へ書院<sup>しよゐん</sup>先<sup>まへ</sup>の鎗水<sup>やぶみづ</sup>も、打手<sup>うちで</sup>も靡<sup>な</sup>く、妙<sup>たう</sup>仲間<sup>なか</sup>座<sup>ざ</sup>取<sup>と</sup>役<sup>やく</sup>や掃除<sup>そうじよ</sup>番<sup>ばん</sup>、其<sup>その</sup>役<sup>やく</sup>を  
 割<sup>わり</sup>付<sup>け</sup>て、一<sup>ひと</sup>つ所<sup>ところ</sup>へ寄<sup>よ</sup>り、何<sup>なに</sup>と玉木<sup>たまぎ</sup>とふ思<sup>おも</sup>やる、今<sup>いま</sup>鎌倉<sup>かまくら</sup>のお屋敷<sup>やしき</sup>で、い  
 の若<sup>わか</sup>旦那<sup>だんな</sup>がよい男<sup>おとこ</sup>、おさきや〜、迎<sup>むか</sup>も男<sup>おとこ</sup>を吟味<sup>ぎんみ</sup>しても、生物<sup>せいぶつ</sup>の入<sup>い</sup>られぬ、  
 乾物<sup>かんぶつ</sup>で仕廻<sup>しまわ</sup>ふて、おさきや、生物<sup>せいぶつ</sup>をたべ過<sup>す</sup>すと、お谷<sup>や</sup>様<sup>さま</sup>がよい手本<sup>てほん</sup>親<sup>おや</sup>の赦<sup>ゆる</sup>さ  
 ぬ徒<sup>いた</sup>と親殿<sup>おやだんな</sup>様の<sup>よう</sup>は勘當<sup>かんだう</sup>、毎<sup>ごと</sup>〜お詫言<sup>わがことば</sup>も出<sup>い</sup>なさる、い、かいとしい  
 事<sup>こと</sup>でないか、追付<sup>おっつけ</sup>お越<sup>こ</sup>なされたら、そなたの部家<sup>べけ</sup>も置<sup>お</sup>まして置<sup>お</sup>てたも  
 思<sup>おも</sup>いぬ咄<sup>はな</sup>しで隙<sup>ひま</sup>入<sup>い</sup>た、必<sup>かならず</sup>晩<sup>ばん</sup>の宿<sup>しゆく</sup>下<sup>くだ</sup>り、飯<sup>いひ</sup>簾<sup>せ</sup>の床<sup>とこ</sup>のふつてり、握<sup>にぎ</sup>りてた  
 へのあるのを、土産<sup>つちざん</sup>も頼<sup>たの</sup>むと打笑<sup>うちわら</sup>ふ、一間<sup>いっけん</sup>の襖<sup>ふすま</sup>明<sup>あ</sup>暮<sup>くれ</sup>も、血<sup>ち</sup>を分<sup>わ</sup>し、子<sup>こ</sup>と血<sup>ち</sup>  
 を分<sup>わ</sup>ぬ、義理<sup>ぎり</sup>のかつらよからまれて、柴垣<sup>しばがき</sup>一間<sup>いっけん</sup>を立<sup>た</sup>ち出<sup>で</sup>て、何<sup>なに</sup>をさ〜



共掃除仕廻り勝手へ行か谷殿を是へ呼や、必し目立ぬ様も有ければ  
と答へて、必共皆し勝手へ入るけり、けふも又何と言寄方もなく、詫  
お谷が細切てまはしとして座も直る心がらとい言ながら、我内なが  
ら人目を忍び、夫も付添女の道政右衛門事、我夫のお氣も入、天晴の  
逢人なればけふや殿へ目見へ願はん翌や取次せん物と思し召たも  
恩が仇、そなたが連て立退し、不屈き者と勘當、自が身も成てたも  
世繼と定るわの志津馬傾城狂ひ、身を持崩し、万一は沙汰有ては  
前勤の願ひをさげしも、我子を思ふ夫のお情、世間の取沙汰口惜く、繼子  
繼母の隔有柴垣とばし思やんなど、夫も随ふ貞女の道言聞されて差り  
つじきとかふ詞もなかりしが、漸し顔を上、何とぞ今一度父上のお赦し  
有、お詞をお願ひなされて下さりませ、其事は氣遣ひ有な、一旦夫婦と  
成たれば、世間を守るが男の役、適の侍を埋れ、木となさん様もなし、命も

かへて願ふて見ん、先それ迄の自が部家へ行きや、早ふくといふ折か  
ら、澤井様は出と知せと俱し打通れば、隔る柴垣お谷をば、ちらと見るが  
空うそふき、胸り驚く奥方も、お出と計詞なく入んとするを、奥方、換  
撥もなく入なさるし、先生の病氣毎日お見舞も得ずさぬ、其立  
腹が有ての義か、拙者連も病身故お断の願ひを立、前勤もとくより引  
て罷有、は沙汰の段は死下され、何の親は又左衛門様から  
懇な間がら、其換撥及べぬ事、成程く其懇意について、いつぞはお  
尋ずさふと存じたが、其元様の先生の後連、先奥方の腹も出生の志津馬  
殿、今一人お谷殿と姉は有たが、いつ頃からやらとんと見請ずさぬ、  
嫁入なされた沙汰も、あいが、やはりお家敷もさるかど、譯知ながら問  
かける、そこよ心を奥方の何と返答口も、一間の内方立出る和田行  
家、病氣ながらも尖き眼中、よくぞ澤井氏、心よかけられお見舞過分



過分、先生存じたよりの顔色も宜しく、珍重も存じます、扱今日参つた  
 の密、よお咄しやたき事有て、中奥方へ冷るよお蒲團上られいと、いふ  
 を立端、柴垣の、妙共燭臺持こいよ、と立て行、股五郎摺寄て、お咄し  
 とすの別義でござらぬ、兼て貴公の家と手前どの一家同前、殊も拙者劍  
 術のお世話も預りし先生、心腹を打割てお咄し合致す中、貴公様も同  
 前、そこを存じて、内分もてす上ふと存じ参上致してござる、是の、お  
 互もは懇意も致すからぬ、何事よよら承りたい、は遠慮なふお咄し  
 なされ、別義でもござらぬが、正宗の刀私も譲り下さるまいかなと  
 思ひがけなき一言も、返答なけれ、斯やた計での合點参るまじ、か  
 うでござる、正宗の刀の質物も入てござる、个様すせば、志津馬殿の事訴  
 人致す様なれど、譯をすさぬとは合點が参るまじ、悪ふござる、吉原  
 の瀬川とす遊女も迷ひ、正宗の刀を質も入身請の相談極りしと承る、

とくも拙者存じたならば、は異見でも仕らんと存じた所が跡の祭り  
 正宗の刀の他家の物も成ます、そこを存じて、拙者方へす請れば、貴  
 公なり、手前なり、兩家も有も同前、は内談どの此義でござると、お爲ごか  
 しよ云廻す、心の内ぞ恐ろしし、日頃は懇意も致す間、恥めが不屈は  
 世話下さる段、手を突てお禮申、千万忝ふ存じます、扱、不屈な恥め  
 此お世話は無用もなすつて下され、なせでござる、右の刀の則私方  
 へ請戻してござる、正宗の刀の請戻したとな、夫の重疊、志津馬殿の  
 な、勘當致した、若、个様の義沙汰有て、万一殿様より尋、預し時、譯な  
 いと存るから、右の刀を請戻しは沙汰なき中、恥め、勘當致した、氣の  
 毒、千万、時よ外も頼すたいの、私、未、獨身でおりますが、どうぞ姉はの  
 お谷殿を、拙者が妻も下さるまいか、子也、行家服の、家督、拙者が  
 預り、其内よ、志津馬殿、お心も定りなれば、渡しすの相違なし、是非お谷



殿を申請たい、此は相談のどふでござるな、深切添が、其お谷めが事  
 の唐木政左衛門と申浪人と密通致し、家出したの四年以前、个様の不屈  
 者なれば、勿論こやつに七生迄の勘當、貴公も此義のゆさいでもよくは  
 存じで有ながら、何かこりや座興でござるのど、何をいふても請付ぬ、  
 始めの耻辱は、股五郎、何かな見出し、付込んと、白眼廻せば立聞お谷三人  
 一度も見合す顔立切障子驚く行家、く悪い、今爰へ出ると身が武士  
 が立ぬ、屋敷も叶ぬ出てうせいと、追出して置ましたと、云紛らせ、高  
 笑ひ、行家殿何いづまやる、娘やるとあらぬ、あらいやで濟事、  
 手前小身者と侮り嘲罵召るの、耻辱を與へるのか、股五郎の武士でござ  
 るぞや、侍でござる、娘の勘當致した、屋敷も居る物を退出したの勘當の  
 と、貴公殿の名代も一家中を納る役での、いか、それで家老職といひ  
 れますか、志津馬を勘當仕たといふの、偽り、是も屋敷も隠して置、正宗の

刀貴公が質も入たで有と、愚口雑言出ほうだい、こたへ兼て膝立直し慮  
 外なり、股五郎、儂が親又左衛門の身共より上座の家筋、其儂と思へばこ  
 そ、劍術の弟子ながら禮義を以てあしらへば、伸上る法外者、心得ぬやつ  
 と思へ共、何とぞしてため直し、親の跡目を繼せてやりたさ、鎗の一手も  
 教てくれた師の思を打忘れ、恥志津馬をそり上て遊所へ進、正宗の  
 刀を質も入させ奪取て、それを落度、我家を滅亡させんと、よくも工ん  
 だ人非人め、こりや儂が智恵計でない、正宗の刀も望をかけ、頼んだやつ  
 が有ふがな、其頼人も合點たり、眞直も白狀致せ、莫耶が、頼も持人によ  
 る、正根腐た、股五郎、病勞れても儂らとときよ、正宗を出すも及ばず身  
 が指料の此刀工の腸引出して洗ふて見せふか、何と、胸も覺への  
 一とを見透されたる、股五郎、頬赤もまよげ鳥の返す詞もなかりしが、  
 面目なげも顔を上げ、そらや誤た、相果た親共が義を思召れ、折節の



異見が耳に當たひがみ根性彌つゝのる色狂ひ、放埒の友を拵ふと志津馬殿を廊の魔道へ引入たれ成程拙者そふ見顯されてからい一言もござらぬ好色は魂奪れ大恩の師匠を仇に存じた非義非道只今夢の覺たる心地は推量の通り正宗の刀、拙者が持て何れ致さふ有様の色遣ひの金がほしさそこへ付込右の刀を奪取てくれるならば金子千兩禮物は遣さふと頼んだ者も外ならず拙者めが一家ながら思へばこいつが悪智恵の根本から打明てや上るの今心改る證據、仮も悪い工みの致さぬ事もふくくふつこりばてました、是迄の不屈最前よりの不禮の段、先生真平は免下されこれふ計でい得心有まい彼正宗を望た物、拙者への頼みの書状は目よかけるが、二心ない股五郎が譯と取出す一通手は渡し、懺悔は誠を荒涙誤り入たる有様よ、心よ油断しなければ共、良病中の老眼は燭臺引寄状の當名、澤井股五郎殿、同城五郎

さも有んと長みをつぶく胸は疊越突出す白刃と右劍の抜打真向へ切付る、國賊めと付入て、澤井が肩先切付たり、こなたもしれ者請流し、道が名を得し行家なれ共、初太刀の手疵は眼眩、請太刀は成てたぢ、たぢ引よと見へしが飛違へ、澤井が眉間丁と切下付込すくい、切脾腹を掛けて切込太刀先さう所よや當りけんどつかと座する様の下、股の付根を貫く切先、立もせずたしみがけ、非業の劍よ和田行家むさんの最期ぞ是非もなき、どめの刀引ぬいて疊あぐれば、奴の實内、澤井様お首尾の、主よ見かへて身共へ加勢、適出かした褒美くれふ、忝しと立寄實内けさよすつばと、透りを見廻し、兼て工みの股五郎、上段の床の間の刀箱取出し、蓋押開けばこりやとふじや、刀はなくて狀一通、この心得すと星明りよすかし見て、正宗の刀一腰子細有て私方へ預りや所實正也、和田行家殿、佐々木丹右衛門判、扱ひ刀の丹右衛門が預り居よな、無



益の骨折口惜しと、手疵まえつかと鉢巻め、表の目飛石傳ひ、裏道さして落て行、曲者が入たるぞ明しを、持と奥方の聲も追ふ、必共折から欠くる丹右衛門、伏たる死骸の、行家様先生を何者が手まかけしぞ、今曲者が此小柄、澤井股五郎、遠くの行まい家來共、表をかこへと高股立、聞と等しく家内の騒動上を下へと立騒ぐ、桐が谷の裏道づたいは勅使見送り奉る跡押への澤井の一黨、其身の素襖、欠烏帽子皆一様の装束、君臣の禮義、黙止がたく、星をあざむく高挑燈事、嚴重も見へまけり、備への中を股五郎、疵持足の裏道を押分て打通れば、それと見るより野守介、股五郎殿でないか、心得ぬ面体氣遣い、まど、聲をかくれば、傍り寄兼て、中談せま通り、今日行家が方へ参り、何角事を謀しよ、こつちの底意をけとりま、上、法外成中分骨髄も徹したれど、強敵の行家なれば、計略をもつて、只一討、併殘念なり、正宗の刀、持歸らんと存じた所、丹右衛門が預り居

事、慥な證據の、此一札、城五郎殿、我是へ來りし一人の母の事、何卒は世話頼たい為計り、一家の好お頼み、一日までも生延て、行家一家の奴原も、未練若と云れん、家名の耻辱、一家の耻、我一人切腹致せば、跡の難義の氣遣ひなし、此世の名殘おさらばと、云捨てかけ出す城五郎、聲かけ、先待れ、股五郎、身不肖なれ共、澤井城五郎おかくまいやたい、意氣地まよつて討れし、我が頼みし事起る、聞捨て致して、武士道の表が立ぬ、此上の我が命まかけてかくまひん、先祖の意恨、今此時出かされたり、股五郎、譬和田一家のやつ原君命を以て來る共、何程の事有ん、一時も早く屋敷へ歸り評議を定めん、油断の不覺の基也、露路の用心氣遣いし、氣を付られよ、近藤殿、其義のちつ共氣遣ひなし、歸宅濟迄は、役目指でもさし、彼らが家の一大事と、備へを乱さず振出す、威光輝く鎌倉山、連て我家へ立歸る



○第三 圓覺寺の段

されば澤井股五郎行家を討て立退より直まかけ込圓覺寺門戸を閉じ  
 て關近藤海田荒川澤井を始智昵近の若殿原若上杉が寄來る共引か  
 へさじ弓鉄砲佛の説し法の庭平等大會も引かへて修羅の街の大評定  
 方丈せましと詰かけたり股五郎一禮し物數ならぬ倍臣の拙者城五郎  
 殿の一家の好其縁又連は歴くの昵近衆はかくまい下さる段身又取て  
 の面目此上赤し併赤がら主人上杉憤り深く拙者が母を人質又捕へ置  
 股五郎を渡さずば母を成敗するとの難題我故一人の母を殺すも不  
 孝且の好もなき昵近方斯騒動又及ぶも氣の毒やはり拙者を上杉へは  
 渡しなされ下さるべしと邪智を隠せし賢人顔野守之助進み出何さく  
 其遠慮より及ばぬ事此度我々が荷擔するのわ手前の爲計でない上杉  
 より此方共年來の意恨有武將のは先祖尊氏公より譜代相傳の昵近武

士元弘建武の古へ尊氏公も粉骨を盡し忠義を勵みし我々が家筋上杉  
 を始其外の諸大名の旗色のよきも従ふて降参した腰拔の家筋我の顔  
 又高祿を取昵近衆を蔑又輕しむる日頃の存外ことがなありと思ふ折  
 節わ手前をかぐまふたの上杉も恥を與へる爲さ案の如く上杉此事を  
 憤り追付是へ押寄んと軍評定最中の由今太平も治つて茶の湯遊興も  
 日を送り鎧兜の着様もしらぬ國大名何程の事有んや野守殿の仰の如  
 く日頃个様な事を待受武藝鍛練の我が一まくり又蹴ちらして昵近武  
 士の意恨をはらすの今此時敵方より寄ぬ先此方から逆寄もして上杉  
 又泡吹せん尤と立ち騒ぐ城五郎押止め暫らく某が所縁有股  
 五郎をおかばい有何れものは深切忝し去ながら行家を討たる事の起  
 りの此城五郎が頼みし事其子細の此度武將の公達任官の御祝儀も  
 付諸大名の名劔を献ぜらる然も行家が家も持傳へし正宗の名作有主



従の事なれば、上杉是を取て献上すべし左有<sup>れ</sup>彌上杉が鼻高く、威をふるん事心外至極、何とぞ此刀を奪取て、某が手より献上すれば我の勿論<sup>ろん</sup>近衆の手柄も成<sup>ま</sup>と存じ、股五郎云ふくめ、行家めをぶち殺さした<sup>り</sup>、正宗の刀を取ふ爲計思ひの外此刀、行家めが手よりなく、佐々木丹右衛門が預りある由、股五郎を請取たくば、老母鳴身が命を助<sup>たす</sup>、并び正宗の刀を此方へ渡せよと、難題<sup>なんだい</sup>の使者を立たれば、此返事の有<sup>あ</sup>り、暫くお扣へ有れよと、云間程なく馳來る門番の歩<sup>あ</sup>の者、佐々木丹右衛門が今朝のは返<sup>へん</sup>翰と、指出す文箱を城五郎封押切て一通をさらく<sup>と</sup>讀終<sup>よみおわり</sup>り城五郎が思ふつば、股五郎をお渡し有<sup>あ</sup>る母鳴見が擒<sup>とら</sup>を救し、正宗の刀を遣<sup>は</sup>りすべし、追付二品共丹右衛門持參致さん此文言、後刻は出を相待居ると、口上を以て返答せよと、蓋引まひる明文箱取<sup>と</sup>早く走り行<sup>い</sup>、城五郎殿一旦かくまふた股五郎今更のめく<sup>と</sup>上杉へ渡し、夫で武士が

立ますか、我も其意得ぬ貴殿の上杉が恐ろしいか、憶病神が取付いたか、卑怯<sup>ひけつ</sup>至極と詰かくれば、股五郎押まづめ、どなたもおまづまり下されい、城五郎殿拙者が命<sup>いのち</sup>おしみのせねど、武士の意地を立<sup>た</sup>ぬく貴殿が今<sup>いま</sup>成<sup>な</sup>てふがひなく、上杉へ渡さふと、聞<sup>き</sup>へた行家をぶち放した計で、お頼みの正宗手を入ぬは立腹<sup>たつぷく</sup>、夫故でござるな、左様の事ではない今合戦<sup>がくせん</sup>も取結ぶとも、只世上を騒<sup>さわ</sup>す計、望の刀が手に入ねば無益<sup>むえき</sup>の沙汰、一旦和睦<sup>わくわく</sup>も事を納め母の鳴身と正宗を請取た上、お身も縛打て心よく相渡し、使者の歸りを思ひがけなく、多勢をもつて引包み奪返<sup>はな</sup>す我工夫、いづれも必隱密<sup>ひそか</sup>くと、聞て皆<sup>みな</sup>勇立<sup>いさ</sup>、誠<sup>まこと</sup>も智謀勝<sup>ち</sup>し貴殿、左様あらで叶<sup>かな</sup>ぬ所、然<sup>しか</sup>らば各其用意と、騒<sup>さわ</sup>ぐを押へて、先待れよ謀<sup>はかりごと</sup>の密なるを以てよしとすれば、某が詞を出す迄、いづれもお扣へ下さるべし、股五郎が後の災免<sup>わざわいめん</sup>れさする屈竟<sup>くつげい</sup>の、忍<sup>しの</sup>び所の九州相良密<sup>さうらひ</sup>も落す用意万端



吳服屋十兵衛是へ参れ、答へて次の間々、小腰かゝめて並居る中、おめず臆せず畏り、股五郎様のは身の上、委細とつくと承りました、城五郎様への、數年來は出入の私、相良への商ひも毎年下る道案内、見込で頼り、太切のお供、畏つた商人冥加、多年のは恩報じなれば、ちつともお心置れますな、町人でこそ有心の金鉄、二人や三人の苦みの致さぬ腕は請合けちりんも掛直のやさぬ吳服屋が、めつたよ引ぬ太り地の男一疋頼もし、股五郎片類も笑、扱く氣味のよい男、敵持の供すれば、肌刀の放されず、行家を仕留た時、見よ、弓手も二個所の疵忽治したる此薬、城五郎殿の家も傳へる、南蠻國傳來の妙薬、身共を同道の人へ、いづれも是を懐中さする、お手前もまさかの用意、此印籠を預るが、股五郎が一命を頼印と手も渡せば、是は結搦な薬でござります、怪我と病氣の何時知らず、道中の肝心と取納めたる折こそ有、又もかけ来る遠見の者、

上杉の使者佐々木丹右衛門綱乗物一挺供のわづか三人、只今門前迄、よし、云付し如く門を開き、随分神妙も取はからひ、此所へ使者を通せ、いづれも裏門より先へ廻つて待伏の用意、くはやり男武士我一急、裏門口、股五郎の十兵衛と引連、奥へ入、よける琴を弾じて、敵を避、竊寇として、檻牢の謀もや有らんと心救さぬ、丹右衛門、使者の禮義の上下も、四角四面の方丈へ綱乗物を昇入させ、まづと打通れば、城五郎、威儀繕ひ、開及ぶは邊の佐々木丹右衛門と、今日の使者太義、今朝も云送りし通り、武士の意地もよつて、争論も及ぶといへ共、かく静謐も納りし代も私の意、恨めて合戦を取結ぶ、武將への恐れ有、罪の罪成、股五郎望も任せ渡さんなれば、此方方も望しとく、正宗の刀、并びも老母、鳴見が事、上杉殿も定て送られつらん、すな、成程、主人上杉顯定怒りの元、股五郎一人逆、磔の刑も行ひ、國の政道を正すべき存念、股五



郎だよお渡しし有べ外も曾て子細あり、則是こそお望の正宗、并びも老母を誘引せり、改め下さるべしと、箱も納し持参の刀取出せば手も取上、切先物打細元とつくど改め鞘も納め、開し違はず、天晴名作、慥も落手と引さげて立上る丹右衛門引といめ、鹿忽也城五郎殿、股五郎を是へ出し、老母と互も取替さる中、むざと刀はお渡しやさぬ、解死人股五郎も繩打てお出しなされ、近頃我儘千万と、眼を配る勇氣の面色、實尤是の身共が鹿相、然らば刀の暫くそれと追付解死人渡しやさふが、先其方の囚人老母鳴見が替らぬ體、母も科なれば最早繩目も及はずと乗物の網取拂ひ、引出す姿縛り繩、子故も科を身も老の耻と、鳴見が愛思ひ是非も繩目をほどき捨、丹右衛門老母も向ひ子息股五郎を此所まで請取上り、其元が命を助け城五郎殿へ渡すべき旨、今朝殿も仰の通り彌承知成べしと、聞て鳴見は顔を上、誠も悴が不所存故、あなたこな

たへは苦勞かけ、借いやつどの思へ共、天地の間も親一人子一人の股五郎、未練共比興共笑ふ人の笑ひもせよ、どふぞ助けてやりたいと思ふが親の身の因果、主人へ對えては不忠者の恥なれ共、母が命を助ふ爲、繩かゝつて出よふといふ、此親も孝行者、老年寄た此母が詮ない命生延て我子が刑罰も行はれるを、詠めて何の嬉しかろか、情返つて恨めしい、股五郎此母のどの様な愛目も逢ふが殺されよふがちつ共構はぬいといひせぬ、必愛へ出てくれるなよならふ事なら此ばを替りも殺して股五郎が命お助け下さりませ、悪人でも産だ子も違ひがなければ、いちらしい、お慈悲、と思愛の子故も迷ふ愛涙どめ兼て見へけるが、思へば誰も恨なじ、此科の起りといふはよししない刀も、念をかける成敗も逢も名作の刃は我子の敵と云つゝ、還寄袴鞘をすいと、抜手も見せばこそふゑのくさりをかき切たり、是のとかけ寄、城五郎、佐々木も仰



天乗物へ、手負を打込まつかと押へ城五郎も目を放さず底意をたぐる。錠繩ふしなわ、又も大事と見へよけり、澤井わざと空とばけ、丹右衛門、契約の通り鳴見を受取やさふかいいかよも科人股五郎を請取かひり、母が命は助くべしと契約のやたれど、佐覽の通り、只今老母は自害致た併し此方の手で殺しぬせす我と我手も相果たは某が存せぬ所、だまれ丹右衛門、かくまふた股五郎を了簡して渡すは何故老母を受取ふ爲計、親の命を子よかゆる太切の鳴見なせ殺した、元のとく生て渡せ左なくば澤井股五郎もいつかかゝく渡しぬせぬ、老母を早く請取ふ、何となくと詰かくる丹右衛門ちつ共騒がず、鳴見が自害のいふて返らす弟子として師匠を殺す極悪人の股五郎、目の前で親が死だればとて、悲しむ様なやつでなし、まして縁者の城五郎殿、鳴見が最期を夫程も惜まつまやる様のない誠の老母が事の付たり、正宗の刀がお望でござらふがの、夫共刀

の入りぬ、老母を生て返せとわらば拙者とても詮方せんかたあし約束やくそく變改へんかい元の白地罷歸つて此越主人上杉も言上し一家中是へ押寄鎗先を以て股五郎を生捕する分の事、人非人の澤井が母、死神の付たは是天罰、軍の血祭早くたればと、手負の刀ぐつと引拔、正宗の刀の切味お望さらばは相伴あされよと寄バ切んず屹相きつあひも肝先きんせんひしがれ城五郎、是さく、丹右衛門此方事このあたりのことの好ぬ、いか様よく思へば自身覺悟の鳴見が最期全くお身が業でいあい、刀さへ渡し召るれば云出した武士の意地さつぱりと立といふ物、股五郎をお渡し有か、渡さいで何とせう元より彼も覺悟の上、股五郎最期の時刻近付たり尋常じんじょうも是へ出やれ、とく方支度仕ると返答立派騒がぬ澤井海田荒川前後を圍ひ、其身の丸腰まるこし悪びれず優くと座も直り何お使者は太義傍輩たぎぼうばいを討た意趣いしゆの元の外でない老ぼれの和田行家、年よめんじて立てやれば付上り、此股五郎を劍術けんじゆつの弟



子などし師匠顔が胸悪さ何の苦もなく討放した、は身達も安くと搦捕る、股五郎でいなけれ共、身共故に一國の騒と成が氣の毒さよ命惜まぬ武士の覺悟城五郎殿、は政法も行われよとむす座を組手を廻す、適く、其方が命一つで、騒動納まる國家の爲、恨と思ふか股五郎と捕縄たぐつていままぬ縁よつながら城五郎、身共が潔白見届けたか丹右衛門、是で主人が心も満足、扱此老母死骸を進上すさふか、死人の入ぬ持ていよやれ然らば科人、其刀只今取かへ請取ませう、いざと縄付棒鞘を渡す目配り、請取氣配り互に屹度立別れ、是で双方意恨もさつぱり、老母が死骸の乗物よ此儘屋敷へ早急げ、おさらばと目禮も龍の腮を出て行危かりける、次第なり影ほの暗き黄昏時縄付引立丹右衛門、前後を固めて行過る、思ひがけなき山門よりはつしと射かくる白羽の矢膝よかつきと、いかよと引抜間も又一筋弓手の腕よ立騒ぎ周章驚

く同勢が中へむらく、物影を、顔のれ出たる數多の武士物をもいわず、拔連て家來を胴切車切切ふせ、一文字も切てかゝるを丹右衛門前後左右よ渡り合、其間よ澤井を引包み何國共なく奪ひ行、南無三寶どかけ行を荒手を入替たしみかけ、既よ危ふき其所へ、心ならずもかけくる志津馬、一大事と拔刀、命限り根限り火花を散す、強勢勇氣相人の大勢身の二人金鉄ならね、丹右衛門、數个所の手疵刀を杖、志津馬殿か、口惜や股五郎を奪取れた無念く、と討かつばと伏、はつと志津馬もとらと座し、よゐるを付入家來共、おくれせよ池添孫八片端撫切ぼつ散し、志津馬をかこふ忠義の働き、お谷も斯と氣もそいろ足もしどろよ走り付、志津馬の手を負つたか、若旦那手の浅いぞ、氣を慥よくと抱起せば、手疵よの痛まねど、是が正氣を失なはずよ居られふか、股五郎の手よ入らず、正宗の刀の敵へ渡す頼みよ思ふ佐々木殿の此深手いよ



いよ殿への云譯いひわけをし、運命うんめいも是限りど、刀逆手さかてよ取直す、ア、コレ待た、そなたが今死して爺様おやさまの敵かたきの誰たれが討うた、其敵そのかたきが討うたれぬ故此切腹いづく、何ぼうでも放はなし、せしと争あざむふ二人倒たふれ伏ふたる丹右衛門にげゑもん、むつくと起おきて、志津馬しづま早あまるな、股五郎またごろうを奪取うばいとられた、最初さいしょを覺悟かくごの前まへ、正宗まさむねの刀やいば、我手わがてよ有あり、すりや最前城五郎さいぜんじょうごろうよ渡わたされし、ア、ア、贖物にせもの行家殿けいけだんを預あづかりし、正眞せいしんの刀やいば、いつかな渡わたさぬ、誠まことの正宗まさむね志津馬しづまが手てを主人上杉しゅじんじやうさぎよ差上さしあげ、武將ぶしやうへ献上けんじやう有時あるとき、お家の譽はな、是こゝを功こうよ敵討かたきうちの願ねがひを立たさす我工夫わがくわふど、思おもへ共城五郎きやうじやうごろうの音ねよ聞きへし、刀やいばの目利めり贖物にせものを突つけて、受取うけとりぬ邪智じやち佞人ねいじん、先正眞せんせいしんを改かめさせ、直ただく様取やうとりて、鳴見なりみが自害じがい乗物のりものの中なかの疵口きずぐちで摺替すりかへ、贖物にせもの正宗せいしゆん誠まことは是こゝよと乗物のりものを取出とり出す切柄きりば、正銘せいめいの極ごくめ、爰こゝよ今際いまざいの鳴身なりみ、早あたへたへの息いきの下した、股五郎またごろうが親おやの身みで丹右衛門にげゑもん様さまと云い合せ、城五郎じやうごろうを謀たりし、いどうで非道ひだうな斃あめが命いのちの所詮しよせん叶かなへぬ共、殿様だんさまのお手てよ渡わたれば、竹鐸たけのこか

礫いしの成敗せいばいの知した事こと、せめて武士ぶしらしう志津馬殿しづまだんと敵討かたきうちの勝負しやうぶで死しれ、何なにぼう嬉うれしい親心おやこころ、此場こゝを見遣のぞし下くだされどお頼たのみ、てけふの時宜ときよろ、ア、老母らうぼの頼たのみ、いなく共、志津馬しづまよ討うたさよやならぬ敵かたき、わざと敵かたきへ奪取うばいとり、丹右衛門にげゑもん一人ひとりが誤あやり、成なりて相果あひはれば、月日つきひを待まちて本望ほんぼう、遂敵すいじきの首くびを先生せんせいの位ゐ牌ゐの前まへと身みが墓はかへも手向てむかへてく、とやれ頼たのみぞと最期さいごの際きわ、迄いたり、師弟しでいの義理ぎり、我われ敵命かたきいのちを捨すらる、此大恩こゝろおん、いつの世よよ、かへす、も殘念ざんねん、大敵おほいかたきの股五郎またごろう、志津馬しづまが助太刀たすけだち後立ごたてと、頼たのみ、こなたよ今別いまわかる、心の悲かなし、さ、推量すいりやう有あり、不ふ甲斐がひない志津馬殿しづまだん、丹右衛門にげゑもんの死しする共、無念むねんの魂たましひ、此世こゝよを去いらず、郡山ぐんやまの政右衛門せいゑもんこそ我われよ十倍勝じゆじゆりし達人たつじん、早あり、歸かへつてお谷殿おやだん、助太刀たすけだち頼たのみ、とい、いず共、彼かれが為ためも、負まかせ、敵かたき、違背いひがり、あらじ早あり、さらば此世こゝよのさらば未來あしたの門出かどで、丹右衛門にげゑもん様さま、鳴身なりみ殿だん、思おもへ、けふの言合ことあひ、敵かたきと敵かたきが修羅しゆらの道連みちづれ、とい、め、互たがひよ、一ひと刀たと落おたる刀指添さしぞをよろめきながら取上とり、眼まなこ、くらめど



胸と胸差貫いたる、義士貞女歎き志津馬も深手のよりの家來が肩又敵の圍み齒をくいしばつて立歸る心の内こそ「せつなけれ

○第四 郡山宮居の段

君万歳の祈とて神又歩みを運ぶなりく國の初めの其昔、誰名付てや郡山、城下の見付筋武家町人のわかちなく、引もちぎらぬ弓八幡奉納願主譽田大内記殿、諸の番組敷も打納りし隅田川、あらふ目出たや目出たやと、上を見習ふ下かかり、頼てお立を松影又列を正して待居たる、空助が聲高又何と能助とふ思ふ同じ様云の勿体ない事だが殿様の遊藝がお好故、けふの何所の奉納明日の爰、玄やのと、毎日のお能我も其お家又奉公仕て居ながら、其氣のないの冥加ない事でないかといへば能助打笑ひ、何を空助がいふやら、そりや我が藝氣がないよつてそふ思ふ、おらが親のきつい能が名人、名さへ軍陀羅夜刃右衛門と

いふて、道明寺の祈りの段、面白い事だ、能助、道明寺といそりや干飯じやないか、必外でそんな事をいふなよ、諸の名の、何とやら、思ひ出した宗善寺、おかし宗善寺とい津の國又有る事だとい、そんなら我がのも違つた、道明寺の河内でないか、宗善寺又違ひない、片意地な者、能助お身の藝者の子なら狂言の心が有何と稽古してくれまいか狂言覺へて何又する、殿様がお好だ故毎日く此通り、いか又下しじやといふて、其氣のないの何と不忠でない有まいか、尤じや稽古してやる第一足取を稽古せい、おらが歩行よふとせいと、鳥居の馬場を能舞、まさいらしげよ身繕ひ、それく手を振事のない、兩手をかうして、そふだく歩行様を覺へたか、合點じやく、垢切を切した時の歩行様と覺へて居よ、おらがいふ様又跡から云へよ、かやうとい者の此邊り又住居致す者でござる、頼ふだお方が狂言を好せらるゝ故



我も稽古致さふと存する太郎冠者有か、悪い覺へ、此返事よ仕てくれい奴を呼出すの極つて有い、身が前へ出わがらふ、芝居のせりふだのい、お前よぬるくて悪い、そんならよしせろくと、おだ口くを云廻す、お立と觸る聲々、胸り驚きまじく、舞まるか、いみ扣へ居る、威光輝く大内記殿、奉納首尾能納りて早御下向の先拂ひお徒御近習前後を配り鳥居前迄出給へ、供よ、宇佐美五右衛門中扨従よ召連られ、前間近く引添へ、跡押への櫻田林左衛門、指南の棒を振廻し鼻高く、と供す、暫く是よて御詠と宇佐美が詞よ、近習の武士は腰かけを奉れば、遙跡か能太夫源之進は傍近く手をつかへ、今日殿様のお能、恐れながら驚き奉ります、いつくも出来させ給ひ、神も納受まじ、まさん扱一家中、どなた様もきついお上手、殿様の機嫌の程は、親ひ奉るとす上れば、打笑給ひ、源之進、是といふも、其方が指南

の徳と、宣へば、冥加ないは詞時の面目有がたしと、まさつて一禮のべければ、重て仰出さる、浦山しい源之進が身の上、我望の外よなし、能太夫も成て、狸々の乱れ一世一代が仕て見たいわい取分今日の奉納も、我一人の力よあらず、一家中の者迄も満足せねば、奉納と云がたし、殊よ天氣も宜しければ、我悦び限りなし、太義く、と有ければ、皆一統よ頭をさげ、計よ平伏す、五右衛門は前よ手をつかへ、誠よ殿様の意の通り、今日の入天氣宜敷は祈願の奉納一家中の者よ上るよ及、いず我も迄も恐悦至極よ存じ奉る、恐れながら五右衛門が願ひの筋有、先達て取次仕る唐木政右衛門義、劍術を立お家へ奉公よ出し、い所名のみ計よて其器量有なきを、上覽よ入奉らず、何卒林左衛門殿と立合の者、高免遊され、様よ願ひ上奉ると聞も、敢ず林左衛門、是く、宇佐美殿、上へ對し、恐れ多い願ひ、尤政右衛門とやら貴殿



のは世話よよつて、劍術を才立に奉公も出られた人、武士の相互成程か望ならぬ相人よ成て進せうが、そぞやもふ蟻螂が斧とやらや事さ、いかぬ事じや、よしよ仕めされお氣よのさへられな、此林左衛門相人よの餘りおとなげなく何の夫が一溜りも有物か、殿もおかしく思し召、と、とあざ笑ふ林左衛門よの見向もせず、右政右衛門義不鍛錬成者杯と、影口を才者もいよし、左様成者よは知行を給ひりひての取次仕る此五右衛門、一家中へ相濟やさず、是よよつて政右衛門よ立合の義は願ひや上ひ様とや聞せ共、彼も新参者の義故辭退仕る、何卒、此義は上へ仰付られ下さらば拙者が面目此上なしと、餘義なき願ひよ内記殿、武の道の尤なれ共、我其家よ生れながら劍術の事、とんと氣が乗ぬぞや、政右衛門事の家老共がきつい取持、兩人の立合とちらが劍術善悪よもせよ某が構ぬ事、家老共が得心せば、身が事の何時でも見物せん今日の奉納

もどかく家老共不得心、そちの又未明か出て忠勤盡す其替り、余が好ぬ事ながら始ての願ひ、聞届んも道ならず、政右衛門事、辭退致すと、兩人の事、川人方へ云付てくれう其代り、近日若宮の八幡宮へ春日龍神奉納仕たい、又家老共が何といぬふと、其方が計らひせよ、とどかく遊藝が樂しみが深ひ、願ひの通り聞届けたと、は上意の詞よ、宇佐美が面目涙よひれ伏ば、大内記殿仰よ、奉納の場所へ諸人の入込神拜の恐れも有べ、其方の跡よ残り、神樂を上、社内の清め、仕れと、云捨座を立給へば、横よ漫る櫻田が跡よ引添べ、さしめき渡るは供先駒の嘶き響の音本城さして歸らる、は、跡見送り五右衛門の一人言、道大家の殿様是程よお好なさる、お能よかへ、林左衛門と政右衛門立合の勝負、は願ひ申たれば、早速よお聞届下さる、日頃の願ひ本望と、社内をさして行折から、すくと松影より呼かける、女の聲、何者成と見合す顔、は谷殿



いんないか面躰あれし人相氣遣いしやと尋ぬれば、お谷の涙押拭ひ、包  
 ひとすれど女の事有様とお咄しやさん、國元から歸りては政右衛門殿  
 の心底替り出るも入るも不機嫌、此刀を差出し是を持って五右衛門方  
 へ行といふた計も物をも云ず、どふいふ譯やら合點行ず、問かへされぬ  
 日頃の氣質は前と逢て様子もいふと、其儘立て來りしが通りかゝり  
 てお前を見請服様のお立をバ忍んで今迄相待しと、刀取出し差うつむ  
 き暫らく詞もなかりける、宇佐美のつくづく打ながめ、心得ぬ、それ  
 よく、我秘藏せし長船の一腰、其方が親代と成たる印も遣いせし  
 ん、持せ越たの合點行ずと、引ぬき見れば物打も巻添し一通、いかに  
 ど解ほとき見るより悔り、こなたへ暇の一札、様子が有ふ語られよ  
 ど、詞もお谷の仰天し、何わたしへの去状とや、去るゝ覺へ徹座もなし、  
 開へぬぞや政右衛門殿、科もあい身をむごたらしう去といふとたが妨

めた、お腹も十月たゝもない身を情なやとかつばとふして、泣居たる、五  
 右衛門せき立、こなたも武士の娘でないか、魂の腐つた政右衛門跡を慕  
 ふ事のない、口惜い我眼の見へぬが誤り、天晴器量の有やつ、何とぞ出  
 世をさせんと思ひ、今出頭顔する林左衛門と一勝負立合させ、武藝の器  
 量をあらわし、一家中の手本とせんさすれば、殿も遊藝の事か捨なさ  
 れ、武道の道もお心をよせ給ひ、お家のお爲と思ひしゆへ林左衛門と  
 立合をすしむれ共、辭退するの臆病風も引された大腰ぬけめが此儘も  
 相止めも成し時の一家中の物笑ひ、願を上しは前の手前も言譯をし、  
 不甲斐あやと計めてどふと、座を組居たりける、お谷も俱も泣くとき、夫  
 の心の直る様、比喩者といわれぬ様も、思案を頼む五右衛門様と取付  
 歌け、そふ思ふも尤、最前も殿のほ前で、林左衛門めが我も向ひ、彼等  
 を相人よ立合のおどなげあしと、人もなげなる雑言過言聞ぬ、顔の何ゆ



へぞ、お家のお爲二つよの儂を、出世させん物と、思ひし事も思を仇但し  
 國元の騒動を聞一家の縁を切所存か、儂ゆへよの勘當請し此お谷某が  
 親と成女房も持せしよ、科なき者も疵を付退出しておこすのみか、親代  
 もやつたる此刀の物打も暇の状を卷付し、我を欺くよつくいやつ心  
 肝よこたへくくこたへて了管ならず、年寄たれども此宇佐美、尖き刃  
 金の切味見せんと一圖も擬たる國侍、お谷の取付、くお待下されど、す  
 いるを拂ひ、愚かく一先こなたの、屋舖へ歸り何氣もなくもてなさ  
 れよ、我も跡を押かけて、事よらば先手を取て切かけん、其時こなたも  
 此刀で尋常よ自害せられよ未練も心残されなど、詞立派よ言放す、夫の  
 心の善惡をと、こづまりしく帯引えり、いさまぬ心取直しいさみ、いさ  
 むや庭神樂打連てこそ立歸る

○第五 郡山屋舖の受

昔の山の跡なれや、今も名のみの郡山家中屋敷もつくろはず、直な唐木  
 の正め有家の柱の退去も、奥様役の留主預り石留、武助の忠義者、常の奉  
 公裏表内證賄ひ聞しき、臺所も必共ばらくと立出、武介殿、今夜の内  
 方へ嫁は様が見へるげな、お目出たい祝言振舞、わたしらもあやかる様  
 よお手傳ひよ参りました、は苦勞く、小身の旦那政右衛門様、仲間一  
 人下女一人若黨の此武助が料理人やら家老やら人手がなさよ、家中  
 の女中方をば無心、待女郎も酌人も各を頼みます、同じお給仕で  
 も祝言と聞バ氣がまよきく、えたが合點の行ぬ事、お谷様といふ奥  
 様、お里歸りなされてから、聞バ去られなさつたげな、まだぬくもりも冷  
 め中新し女房を入るとい餘りな手廻し、今度の奥様はどこからか出  
 なさるの玄や、我等もかつふつ存せぬ、何だか知らぬが旦那が一人呑  
 込で、今夜嫁を呼程よ祝言の拵へせいと云付て出られたから、何か俄よ



料理拵へ、少し計開はつゝた海老の舟盛置鯛、置鳥などといふ、まぢむづかしい事の取置鯛の吸物腹合せの新枕の心玄やげな肝心の鳥壺を忘れて、正月のお古を組かへて問合せ、いかぬ物の銚子加への折形、知てなら折てもらひたい、何の其様も儀式せいで大事ない、仲人さへない嫁入、今迄どこぞもつそりと圖て有た女中で有、あの政右衛門様もお顔も似合ぬ色事仕、先の奥様のお腹が立ふ、馴染の女房隙取して、跡へ来る嫁づらひ、どんなお顔じや見てやりたいと、さがない女子の口――、うたて浮名の高咄し、愛事の思ひの種を身も持て我内ながら心置夫の留主を窺ひ足、妙目早く、奥様よふお出なされましたと、いふも武介も押下り、幸只今旦那のお留主、お歸りならバおまらせやさふ、先お緩りとわしらふ程、いと重るうさつらさ、諸白髪迄といひかはした人の心もかはれば替る、我内へよふ来たといはれる様も成たのいの身も

覺へなければ、其親分の五右衛門様、どの様な誤りしたぞ暇の印の此一腰、譯か立ねバ受取ぬと、お屋敷も置れねバ立寄方もない身の上、見ればいかふ賑やかなが、お振舞でも有のかと、とられてそれと云かぬる跡、先見ずの下女にした、今夜のお屋敷へ嫁はがお入なされます、嫁と誰嫁、武介、よもやそふで有まいと思へど、若旦那殿も、女房が来るのじやあいかや、其義の、武介殿隠してもとふで知る事、政右衛門様のお内義様でござります、下地から譯の有事かして、今夜俄の祝言、わたしらも隣屋敷からお給仕も雇はれました、お前様、先の奥様、つさりと、お妾も、見替られなされた、違ひのないくつと、お惚氣なされませと身もかしくらぬ下りの法界、惚氣も焚付られ、いと重る口惜さ包かぬれば、見て取武介、エ、コレ女中方、役も立ぬ事言すと、お臺所に人がない、爐の炭もついで貰ふ、よく合點じや、皆お出旦那のお歸り待女郎、こ



ちらも嫁の相伴でよい夢見よと打つれて立て行間を待兼てかつ  
 ばと伏て泣居たる、お道理とや／＼またが奥様必悋氣なされますな  
 へ、言やる事いいの悋氣とい一通りの事、非業の死をなされた爺様、弟  
 志津馬が敵討の力と頼むいたつた一人、其夫政右衛門殿縁切たれば誰  
 を頼み大敵の股五郎、いつ本望が透られふ力も綱も切果しと思へば胸  
 が張裂ると歎けば俱泣きやくり、お氣遣ひなさるゝお壁且那がどふ  
 おつしやつても拙者めが命代ても此は縁切しませぬ、悋氣なされ  
 などの事お前様のお腹より、政右衛門様の世繼がござります  
 ぞへ、去狀取ふが後連が這入ふが其お子さへは平産なされたれば切て  
 も切ぬ血筋の縁、政右衛門様の奥様といふり、お腹が證據の、お谷様敵討  
 の助太刀も、頼の種の人參子産月、お氣をもんで過有べとふなされるゝ追  
 付且那お歸り有べ悋氣がましい顔なされず、兎角此内を動ぬ様よなさ

れませ、お合點が参ましたかといへ義理の有女房去て嫁入の祝言のと  
 の且那のとふしたお心玄や、拙者もいつさい合點が行ぬ、此蝶花形私  
 の折様存せぬお前様お頼申すぞ、いひれて手よの取ながら、みすゝ  
 夫を寝取るゝおだ憎てらし蝶花形、犬骨折て、早ぶさの鷹の餌、成春の  
 雛子外、夫の聲聞へ、且那のお歸暫く忍んでござりませと家來が情  
 を力草、逢たい夫、隠るゝも疵持心唐紙を押し明、忍び入よけり、心がけ有  
 侍の地を這ふ虫も氣を赦さぬ唐木政右衛門、伊達を好ぬ刀の柄前人よ  
 勝れし袴の幅上屋敷を歸り足武介手を突、且那、殊の外お隙入、お用の  
 品いいか躰の義でござりませしたな、此間から辭退する彼林左衛門  
 と武藝の試明朝正六ッ時、前よおいて立あへと、押付ては家老の云渡  
 し、今晚妻を迎へまする婚禮の中一兩日お延下されと願ふてもいかな  
 開入ず、女房呼の私事、明日の延されぬと、去どの心ない家老殿、此方内



へ氣がせくも尻又成つて漸只今祝言の持へ用意の出来たか、知  
 行取も飽果た、嫁の来る迄上下脱で休息せん、枕おこせ女子共、ア返  
 事もさし足る角を隠せし塗枕そつとかたへ奥様を、ぬがりの見よ  
 がくれ袴の解と胸解ぬ、するとい常の侍、肩衣折て、たしんで、取直す、詫の  
 種とい見付た夫、武介、あの女子の何者、ややい、ア、あれの彼今日  
 か目見に参つた新参の女中で、ア、旦那さまお目かけられて下さりま  
 せ、奉公人じやな、見かけから愚鈍そふな、ふつゝかな女なれど、遣ふて  
 見てくれふ、ア、今夜の身共が女房を呼むかへる、祝言の給仕や付る、ア、  
 嫁ほどお盃の、其お給仕をせいどのそとや餘り、ア、餘り急な祝言、不  
 調法な私が給仕得せず、奉公叶ぬ立て歸れ、ア、何でもは意の背  
 きませぬと、下女又成ても夫の内、離れ兼たる心根を、察して武介が、呑込  
 涙そふだ、奉公の辛抱が大事、何おつまやらふと、ア、くどそこらを程

よ、鹽梅加減、お盃の用意せうと、料理を盥み立て行、折から宇佐美五  
 右衛門様は出と案内す、ア、又堅どうがうせられた、誰ぞ羽織持こいと云  
 の先から心得て、勝手覺へし女房の徳、機轉聞して後から着せる羽織を  
 ひつまよさく、子供でないわい、差出女めあつちへ行と、晚付られ  
 て、是非なくも、立間せのしく入来る五右衛門、彌左衛門裁の上下このハ  
 り切てむすと座し、政右衛門殿、今晚の其元、嫁入が有と承、は祝儀、ア、  
 参つた、老人の寸志、どとは覽下されと一通を差置、は、是の、婚禮を祝  
 してのは、發句でがな、先以て忝しと、押開き見て、驚顔、ア、こりや拙者への  
 果し状でござるな、ア、存じ寄ぬ、先其意趣の次第の、知た事、科ない女房  
 なぜ去た、ア、拙者が女房を、拙者が去、お手前様が何故の、立腹、ア、いふ  
 まい尤お谷の上杉の家中、和田行家が娘なれどお身と密通して二人連  
 此郡山へかけ込だ、勞浪の体不便と思ひ、且のお手前が器量を見込殿へ



予て有付せたる此五右衛門其上勘當請て親のないお谷身共が娘分よ  
 して改てお身よ呉たれば以前の行家が娘よもせよ今の身が娘少しの  
 見落し有とて去られる義理でないぞよ一旦の恩を忘れ外の女房  
 持かへて五右衛門を踏付た仕方堪忍ならぬそれ共お谷よ據ない科で  
 も有かそれ聞ふ返答次第座の立せぬと鏑打たしいて詰かけたり  
 重くは尤千萬お谷よ微塵も科のなし去た子細の別義でない他申し  
 た女房といふ物の飽てからもよく片時も持て居られる物でござ  
 らぬお聞なされくは立腹の御尤じやが今拙者と罰果されて  
 五右衛門殿殿への不忠よ成ませうなせどおつしやれ今日上は意有  
 て明朝は前よおいて櫻田林左衛門と劍術の勝負を致す此政右衛門是  
 迄拙者を推擧なされ明日も勝負見分の役目を仰付らるゝ其元が此立  
 合も致さぬ中よ拙者をさつぷりと切てお仕舞なされて殿への何と云

譯のなさるゝぞ是非憤り晴ぬと有べ何と致さふ武士の因果明日の  
 前を勤て其跡でお手よ懸りませう暫く宥死下されと理よ詰られてさ  
 しもの五右衛門尤遺恨の遺恨は用は用明日迄の傍輩の役目中よ  
 しくは得心下さるか否忝いく然らば今宵のこれよ緩りと酒一  
 献は上り下され追付新しい女房が参る又其器量のよさ雪と墨との  
 替徳古女房のお谷めり不器量の上よ因果と早ふ子を孕で正具の河豚  
 の横飛飽たを無理どの思し召などおいとづかしを立聞の障子よ齒形  
 も入計登る痞を折しも有嫁は様早是へま待兼た早ふ通せ女子共夫燭  
 臺よ火を燈せ嶋臺躰子と騒程五右衛門がひかづき顔玄關よ奥座敷直  
 ん手ぐりの銀乗物對の箆筒よ染込の覆ひも愛持介添女房太義く  
 伊予宇美佐公只今カ妻が参つたお悦び下されは目出たい義でござ  
 るは推量下され貴公よは退屈おなたよ酒上いよ拙者は酒



たべると胸が悪くござる。是の氣の毒然バお菓子イッお構ひは無用、ッ堅くろしい何がなほ馳走イッ新參の女、何をうろくまい〜と、其不調法での祝言の酌の得せまいお客人の痾癩、とお脊中でも揉であげいと、いふ程腹の立波又音を泣千鳥、四海波扱我等今晚の花簪、上下を着る筈なれど、あたまから打解る様又角菱止て此儘の見參、早く早ふ女共の顔が見たい〜、お心安い御様で嫁は様のお仕合、耻かしがつてござらずと、お出なされませと、乗物明れば綿帽子又、腰の上ハラづもれて、七つ計のいと様は察尺も合ぬかい取はら〜、帯もつられて座敷もどんと、乳母是取て〜、ア其帽子は盃の濟迄召てござれ、ア〜うつとしからふ、取てやりや、し懸女房のは面像と、帽子とらせバ尺長もえまらぬ罌粟の花嫁は、直す三寶土器を乳母が持添戴せ、御君様へ上まする、忝い忝い、女子共皆見てくれ、何とちよつこりと、何處も置ても邪魔なならぬ

よい女房で有ふがな、ッ嬉しい〜目出たふ一ッ次の間々千秋万歳千箱の玉と、諸聲、裾の袖一通取乗立出る、アお前ハ母様柴垣様と驚くお谷又目もやらす、政右衛門又、打向ひ、ぐんぜない此娘を女房又持て下され、此上の本望なし、御引出の此目錄ハ、主人上杉宇内様ハ、聆志津馬又下されし、敵討は免のは書、いよ〜助太刀おされて下さるお心ぞやな、お尋又及バす、承知致いて、罷有、ッ新參の女もよく聞、身共ハ先妻が有たれ共な、親の赦さぬ密通、行家殿の勘當の娘とれ合女夫の悲しさの表立て、御具といふ事ハならぬぞよ、今郡山の扶持を戴く政右衛門が、よしみもない他人の、助太刀が成べきか、コレ此お後の世間情ヲ行家殿の忘れ篋志津馬が妹又違ひない、此子と今祝言すれば、是こそ誠の御具、眞の敵小具の助太刀仕ると、殿へ願ひやさんよ、よも不屈とい思されまじ、かなたこなたを思ひはかつて、科もあい女房、去た開れハ此通り、義理とい



ふ色も迷ふて、五年の馴染見替た心汲わけて五右衛門殿は立腹の段  
くつまつびらく、は免下され我等もふ酔ました何やすやらたわい  
くと、酒もまざらす本性の、云譯開て手を合せよふ去て下さんした其  
誠をちつとの間も恨だ女子の廻り氣を堪忍して下さんせ、身共もよ  
い年をして疑ひの悪口面目ない、天晴武士かな、政右衛門殿、此祝言の敵  
討の門出、武士道も立、家も立、よい嫁を迎へられた扱くくめでたい婚  
禮、我等もどもくお取持と始の腹立打てかへ、一度も顔の色直し、お心  
が解たれば彌替らぬ、政右衛門が後連のお後や、二世かけて、をなたの男  
今夜から抱て寐るぞや、女房共くといへどお後の欠交り、乳母もふ  
いさふとやんちや聲、是の娘とした事が、嫁入早ういんでたまる物かい  
の、三と九献まだ濟ぬ、殿はの盃物さや、わからぬいや、乳母われはし  
ら、あれとい、お餽かへ、さもしい奥様で、有るぞ、道理じやく、かわ

いひ女房も何惜からん、併一の過る、半分の身が預る、是が夫婦のかため  
ぞと、持せばほやく、餽頭恐、忘れた、嫁君のは持参のお道具と、筆筒の  
引出し、廣蓋も盛ならべたる持遊びの市松人形風車、七つは成子も、殿を  
持せ濟えたまやんく、濱松の音のさくんざ、座のかわらねど我夫を、夫  
といわれぬお谷の心、思ひやつて居るの、おの、そもじといなさぬ中、ほん  
の娘の此後と見かへさした繼母が、智殿も悪性根付たと恨でばし下さ  
んな、勿體無事、つかり、わたしが縁の切る、爺様へ不孝の言譯、政右  
衛門殿いつ迄も、わの子と添ふて下さるが、家の爲、志津馬が爲、わしや死  
る迄去れて居るが、嬉しいわいのと、明し合親子の貞心、三國一思ひ、富  
士の郡山とけて、涙を汲かぬ、酒もりも入まめく、と夜も更渡れば、稚  
子が、乳母もふ寝よふと、乳さがす、此お子のいの、七つは成迄、乳母も  
子が有物か、殿はの手前も耻なされ、大事ないく、是からが新枕、共床



と取身も追付寝る、こゝ乳母女房共まゑしやつて寝さしてやりやと痛  
 かり心付く、乳母のお激が抱かへ、寝所も伴ひ入れれば、政右衛門  
 宇佐美が前よ手を突改て五右衛門殿へは頼、や上たき様子有、  
 役には立すと、身共も力も成た、い何なり共遠慮なふ承ふ、どうか、  
 切悉し、近頃や兼たれ共、其元様より明日、切腹なされて下されい、其子細  
 といつば、明六時、櫻田林左衛門と立合仰渡されし、此勝負も拙者負ます  
 る、  
 知て有林左衛門が手の内、ぶつてふち伏るの合點なれど、勝れば前  
 のは意も叶ひ、是れ一家中の師範仰付られお暇が出ぬ時、助太刀の望  
 が叶ぬ、は前よおいて政右衛門物の見事、打負、それを落度、知行差  
 上、浪人して思ふ盡、小助の助太刀致す所存、時よ拙者が、  
 剣術を風聴なされた其元様、負た我等が耻も見損ふたは耻辱、よもや生ていごさる  
 まい、腹なされよや成ますまい、これ迄厚ふは最負下され、様くは思よ

預りし、恩を仇とやさふか、腹切て下されど、中出すの五臟の血を一時も  
 吐くも苦しけれ共、其の敵が討たさ、志津馬も本望をとげさした計よ、  
 かやうの不届をや上る、は救されて下されと、鬼を欺く政右衛門、わつと  
 泣たる眞實も、感じ入て、尤も命進上、何れも安い事、只残念なり、林左  
 衛門め、耻顔かゝせんと思ひし、返つて此五右衛門面目を失ふて相  
 果るの悔しけれど、貴殿が本望とげたれば、骸の上で身共が耻も、其時雪  
 く暫しの無念、誠有侍の爲も、皺腹一つが役も立ば身も取て大慶く、と、  
 死るを常の武士氣質、聞たか主人も預るお命を、我も下さる、有が  
 たいとお禮やせ、女房共どのいれぬ表、親子共又云ぬが孝行、勝べき勝  
 負を負るも、義心、耻辱を取ては最期も、侍同士の情け、互も禮義の中  
 く、涙催す八つの袖時計の七つせのし、早く、早勝負の刻限近し、身  
 の先へ登城致す、用意有政右衛門、貴殿のお暇出るを相圖よ、身共が切腹



此邊の直様鎌倉へ出立冥途の出立早参るは苦勞後刻と式禮黙禮性急  
 武士の短夜や、明る間を待最期の門出いさんで、此前へ「時過て早明六つ  
 の知せの太鼓朝日輝大廣間大内記殿上段の縛り着座近習の武士各見  
 物晴勝負政右衛門の大のまなへ、櫻田の兼て、好む所のさぶり流、長柄  
 を持て待かくる、双方呼吸の透問なく先を取んといとみ合ふ、切先刃金  
 のなけれ共、劍を削る心の具、打合ふ敷の帳面、見る人、くも息を詰  
 暫く時を移せしが、兼て期したる、政右衛門櫻田が鎧先を、おしらひ兼た  
 る手の狂ひまなへがらりと卷落され、鎧もひはらをと、と計がりと倒れ  
 てうつぶし、面目あふこそ見へよけれ、勢ひ込で、林左衛門、何れもは  
 らうじたか影で、廣言の誰もいふ、まさか勝負よか、つてい、なま兵法が  
 役も立物でない、此様なぬけ作を、お取持なされた五右衛門殿、何と今  
 は合點が参つたか、天晴のお目利、と嘲哂譏りも覺悟の前、此前

日向謹で、不鍛練の政右衛門を推舉致せし不調法恐れながら申譯と、云  
 もわへず肩衣はね退差添ふ手をかくる、待五右衛門、あれ留よ、は意宏  
 や、切腹先待れよと、近習の聲、と計暫し、扣へてひれふせば、櫻田林  
 左衛門唐木政右衛門、兩人共是へ参れ、と一度の答さへ、肩で風切櫻  
 田と、唐木の枯しえほれ、杖見すばらしげ、と隨、政右衛門、只今の勝負、  
 大内記是よて、逐一見届、其方が致し方神明と思ふぞよと、仰よ、と  
 計夢見し心地一座の不審、其方共、今の立合を何と見た、尤勝負よ、  
 政右衛門負たれ共、始つて、見るよ、身構へ太刀捌き、よつく鍛し、誠  
 の達人、林左衛門が、中々及ぶ所ならず、彼が心を察するよ、新参の身を以  
 て古参の者よ、恥辱をあたゆる、武士の情よ、あらずと、わざと勝を譲り  
 しの、劍術計か心迄奥床し頼もま、併し乍ら是迄遊藝を樂しみ、武藝よ  
 疎き大名と、贈よ云れし大内記、劍術の批判覺束なし共、云べきが弓取の



家よ生れし身が、武藝をまらぬ様有んや、然れ共弓を袋よし、太刀を鞘よ納る、太平の掟、今足利一統よ治つたる此は代静謐の世よ、弦を引鉄を研鑽よ弓よとひしめく、上への恐れ家衰微の基、爰を思ひはかつて茶の湯亂舞よ日をくらせ共心よ捨ぬ、劍術武藝よく知て居る、身共が眼相違有じ、政右衛門を取持し五右衛門、身が爲よ天晴忠臣誤りと思ふべからず、又林左衛門事、怪我がの勝をそれともまらず、いかめしく罵る、我藝の我でよ見へぬ不鍛練千萬、知行くれる、國の費、暇を遣はず、勝手よ屋敷を立退べしと、案の外成御詮意よ、林左衛門一句も上らず、尖き殿の賢慮よ恐れ入たる一家中、は前よ叶ぬ、林左衛門早立めされとせり立られたりかなめよ、大廣間一人すこく立て行、重て政右衛門よいふべき、新參ながら其方、武藝の鍛練感じ入、貳百石の加増付る、黒書院よて改め、盃今々一家中の師範と成、彌忠義を勵んでくれよと、いと懇

よ仰有、まづく、御座を御太刀持の小姓引連入給へば、近習の面よさめきわたり去として、政右衛門殿、けしからぬお首尾おめでたいく、もふお羨しう存じます、我もわやかる爲お盃が戴きたい、詰所よ相待居まする、扱くくお手柄く、と挨拶悦ひ請る程ぐ、らりと違ふ胸算用、二人の顔を見合す計り、只うつとりと手を組て、政右衛門殿、五右衛門殿、是でいふ暇願れまい、身共も折角切かけた腹がひねよ成つた、どうと腰もぬけ一度よ溜息次の間の襖、わらぬよ妻お谷、肩よかりし柴垣が喉よ懐劍突詰し、母の自害よ稚子の、お後も跡よおろく、目元、二人驚き何故の、此生害、いのふ是の覺悟の上、唐木殿の頼もしい心底を聞上、此世よ用のない體、未來へ参つて、娘お谷が勘當の訴訟けふの様子を見届て、此廣間のお次迄、隠れ忍んで委細の譯、思ひの外の立身でお暇の出ぬ、是非もなし、此上ながら姉も妹も、やつぱりこな様の女



房と思ひ、敵討みの行れず共、心の助太刀を影ながら志津馬が力も成てたべ、兄弟共さらばよと、顔を見上見おろして、盛の梅と替の櫻跡も残して息絶る、このふ是と取付て泣聲人や菊の間、大内記殿の籠中久方は前立出給ひ、改めて殿様の誼意、政右衛門が今日の仕方、定て様子有べしとは、窺ひなされし所、心の底も望有て、わざと我手練を隠し主を謀りし趣、殊も座の次の間へ女を引入、は殿を穢し科もよつてお暇を遣はさるゝ、去ながら暫しも扶持し置れし家來、浪人の娘も盡るも不便されば、刀一腰お暇の印も下さるゝ、殿様の秘藏の信國の名作、敵討の餞別といかづえやれの賣代あして世渡りの助もせいとの慈悲、有がたふ頂戴仕やと、小姓も持せし刀箱、打明すぬ心の底、まろし召れしは恵み、相果し志津馬が母、今少し生延のり、此は誼意を開ならべと、いめ兼たる有がた涙は、籠中もは落涙、父も母もおくれたる共、稚子は手廻は

りて養ひ育る三世の縁、殊更姉の只ならぬお腹も持し大事の身、仮の親分五右衛門の屋敷で介抱如在なふ本望とけて立歸り、元の主従對面を待て居るぞとつとゞく、仰も重き亡骸の宇佐美が屋敷で野送りの供もひかへし若黨武助此世の名残は、殿の名残始の妻と後の妻、生れぬ子も引るれと返す、くも大恩の、は前を拜し、立出る、世の有様こそものうけれ

○第六 沼津の段

東路も爰も名高き沼津の里ふじみ、白酒名物を一つ召せ、く、駕籠よめせ、おかごやろかい参らふか、おかごくと、稻村の影も巢を張待かける、蜘蛛の習ひと知れたり、浮世渡りの様も、草の種かや人目よの荷物も、まやんと供廻り泊りを、急ぐ二人連、立場と見かけ立どまり、またり大事の用を、とんと忘れた、太義ながらわしが、寄た所迄、一走往て來てた



もと、急ぎの用事走り書、さら〜と書認め早ふ〜と手は渡せぬ、主  
 又劣らぬ達者もの心安兵衛逸散元來し、道へ引かへず、稻村影より、且  
 那や泊り迄参りませせうかい、や旦那様どふぞ持して下さりませ、け  
 さから豈文も錢の顔を見ませぬ、どうぞお慈悲と云かけられ、い〜わし  
 の今夜の夜越え行、そこがお慈悲でござりますと、頼かけられ是非な  
 くも、そんなら吉原迄何ぼや、お前様も、わたしが頼で持のじや物  
 えい程下さりませ、そんならやえやれ年寄のよしませいで、そんな  
 さら持して下さりますか、忝い、お出なされませ、任せの聲計一肩  
 往ての立留り、今日の結構な天氣やな、まかせ二肩往ての息を繼、且  
 那や向ふの立場、鱧の名物がござります、まかせと杖する度、追従  
 口ふけ田やおりし、白鷺の餌ばみをするよとならず、見るよ氣の毒、親  
 仁殿、ちつと持てやりませうか、それ〜〜あぶない〜〜勿昧な

い〜、氣の氣な足元、最前から見て居るよ氣えんどでならぬ、是はわ  
 たしが足の癖でござります、旦那のかけで、けふも内入がよござります、  
 ちつとあなたもいくつじや、七十も手がどいてござります、合點  
 の行ぬ足取、お氣遣ひなされませ、若い時の小相撲の一番も取りませ  
 た、まかせとなどいふ下道の爪先上り、木の根よつまづきひよろ〜  
 く、見やしやれ、さついつ事をまたの親指の蹴かいたか、早速直  
 してやろと、用意の薬取出し、付ると其儘、何とどふじや痛の止るが、結  
 拵な薬でござります、痛のどんと直りました、お出なされませ、  
 荷のおれが持てやる、旦那様めつそふな、駄賃のやる、氣遣ひさ  
 えやんな、あなたの足元、最前からあぶなふて〜荷を持方がやつと氣  
 樂あ、咄しもつて行ませう、ござれと、先立平作の千鳥足、えんどが  
 利又成蒨、砂又成かど悲しさ、小腰かゝめて、旦那、一肩やりませ



うかい、いやく是で大分歩行よいこなたの足元茶めいた物じやの、其足取  
 を狂言師も見せたいわいの、亂れ杯と言て、傳授事又成そう事、旦那  
 のおつしやる通り大概亂れかゝつてをりますない、いやくと道の伽す  
 る笑ひ草踏分てくる道草又菊の折枝持そへて、見合す顔りとく様か、お  
 よねじやないか、けふの結構な旦那の供したのでの荷持すよお世話  
 又成たお禮申てたも、いやく有がたい、いやく愛がわたしが内、暫くお休み遊ば  
 しませど、昔の残る風俗も、お葉打枯し松影又伴ひ、入や西日影詫たる中  
 の二人住門の柱又印の笠おかけあさるりや庭一ぱい、いつそ坐敷へ  
 お上りど、親仁が馳走娘の愛前垂の藍薄く共、いやくお茶一つと差出す、こぼ  
 れかゝりし藪屋葺折悪ふ湯もわかず、水で成とおみわを、いやくもふ行  
 まする、扱娘ほのよい器量不躑ながら此内より、せしあげ又咲た杜若よ  
 い床へ生たいのふ、いやくとなたも左様おかつまやります、自慢で作つて置

ましたれど、近頃の手入が悪さよ、いかふ田地が荒ました、何が身又掛の  
 ず賃仕業、貧乏の苦もせず、それの孝行又してくれませす、それで私  
 が年寄ての蜘蛛助も、せめて三文なと肩休めど、餘りあれがいぢらしさ  
 でござります、いやくと様始めてのお方又其様なさもしい咄しを、いやくそふ  
 じや、いやくおよね、けふの大きな怪我を仕てな、いやく是見よ、爪が起て  
 ある、薬もあれは有ものじや、あなた様の薬きつい妙薬ありや何と申す  
 薬でござります、此薬の太切かい物第一金瘡よ、其場で治る妙薬、武  
 家方よ、尋れ共、金銀づくで、手入ぬ妙薬と、語れば娘の猶ほたぐ、  
 どの様の命の親、一日や二日で、お禮のいひも盡されず、ならふ事なら今  
 宵の爰よ、お逗留遊ばして、娘何いふぞいこんな内よ泊まして、肴の干  
 鰯が一疋なし、武外あまたの身よ付物ない、いやく不自由の仕付て居  
 ます、娘はがあの様に、しなつこらしういひしやるので、いやくやら爰も根



が生た、大事なくべいつそ泊て貰ふかいと、目の鞘拔し商人も、上手お娘の響應もころりと成べお枕と油氣のない真身の馳走、是も一樹の笠舎り、尋る軒の目印あてて内入、旦那是もござりまするか、お立なされませんか、安兵衛か早かつた、そなたの其荷物を持って吉原の鍵屋で宿を取りや、日和が知ぬ早ふ行や、雨具の用意の吉原の鍵屋をさして急ぎ行およぬり立て門の戸を引立んとする所へ平作殿内よかど、ぬつと這入の原の町の古道具屋、市兵衛様は苦勞よよふお出、こちも商賣づく、昨日こなたの言えやるの、急な入用錢三貫、道具諸式を直ふして取てくれといふことなれど、代物見てからのとど手附も三百進せて、残りの錢持て来た、駄賃出しての合ぬ仕事、直が出来たらこなた様が荷ふて来て下さるか、時よと、道具といふの、見へ渡つた此通りか、こりや開たどのきつい相違、第一、放しよくいと云えやつた故、見込と思ふた佛壇が、こりや

百が物はかない、ちよと置いて見よ二つべつとい鍋釜かけて、百二十と入い、古壘八疊で三百よ、鼠入の膳棚百五十文、はしりの役よ立ぬ、是十六文、破障子一枚十二文、縁の取た角行燈八文、有増こんな物、家々ちこぼつても壹貫が物のあい、といふて手附の三百の飛で仕廻てもふ有まい、は推量の通りでござります、せふ事がない此壘まくつていのふ、若いの、そこ退て貰ひまえよと、壘はた／＼上かける、すよ尤なれど、今夜の所をば了簡と親子が詫る氣の毒より、ひよんな所へかり合、道具屋殿、わしの今夜泊つた客、是の難義な所よ泊り合した、とんと煤拂よ茶屋へ往た様な、どうで埃のかづかよやならぬ手附のわしが返しまえよ、壘の此儘置て貰をど奇麗に捌く貳朱、一つ是の結構な旦那殿、ちど多ければ爰迄来た賃、次手よ壘も引直し、幔直しよ平作殿、貧乏神のいぬ様よ、箒でお上櫃で、藁の出ぬ前お暇と、つまづき廻つて立歸る親子一度よ手を



合せ、忝い共面目ない共、嬉しいと術ない涙がこつちやふ成て、お禮の詞も出ませぬと、破れ疊ふ喰付バ、今の今夜の宿錢、高で知た親子の世帯、家財を賣代あさふといよく、差詰つた難義な事が有るのでござんせういとしや苦勞さつゑやるの親仁殿此娘はより外もふ子供衆ないかいの、此およねが上男の子が一人有たれど、二つの年養子も遣ましたが、又其親の手を離れ、今の鎌倉の屋敷方へお出入、よい商人よ成て居るとの噂、それ聞てどんど思ひ切ました、又なせよ、一旦人よ遣たれば捨たも同前、我子ながらも義理有物、今其跡が身上がよいとて、尋よいて答かたし貰ふて、人間の道が濟ませぬ、今出合てもわかの人、子といふ此娘一人、それも尤其兄貴、今いくつぐらいじやの、かうつてうと今年廿八、鎌倉八幡宮の氏地の生れ母の名のとよと書付、守り袋又入て遣ました其後此およねを産でかゝも相果、則けふが命日、

で孝行お娘が水手向、花の立方ころおやつて下さりませと、何心なき咄しの合紋、一胸よこたゆる十兵衛、思ひ合せバ覺有扱、産の親父様血を分た我妹が貧苦の有様、有合せた路用の金、なま中親子と名乗て、受ぬ氣質を何どが赤金の遣たい屈詫、胸を痛て、親仁殿何と物の相談おやが、此娘をわしよ下されぬか、奉公よ上ますのか、まだ女房の赤い男利發な娘は、商人の噂の極上上の羽二重地得心して下さるなら、仕替へんこつちから、旅商人の事なれば呼迎へる日限、まだいつ共定められぬ嫁入の拵へ料爰又少く持合す、是おいて逝まする得心かいのどふでござんす、こよい女房、面目ないが最前から、わえやこな様、惚たわいのとまなつきかければ、ついと退、どし様のお方もふ逝して下さんせいか、又貧しう暮して居る迎わたなめ過た、おほうらしいと、打てかりし腹立顔、さ、嗜めよい女房と云れるが、何の夫程腹の立事、我が器量



がよい故じやと、おりに嬉し、イヤあなた様よふは深切又惚さしやつて下さりました、此およねの女房といふてのやらぬ譯がござります、そんならば亭主が有のか、是のく、實の只今ののはんの座興主の有人共存せず、鹿相やた、眞平は免預りませう、こ娘は、機嫌直して貰ひませよ、ア、痛入たお詞、ほんと思へば在所者を、おなぶりさるるを眞受ましてお耻かしやと、莞爾と笑ひよ心打解て、咄しよ紛れてすつぷりと、日の暮て有氣が付なんだ、三日月様が上つてござる、宵月夜で行燈の入ぬ、は明しを伽よして辻堂の雨舎り、お客様ももふお休足延すと壁よつかへる奥座敷、緩りどちいかまつては寝なりませ、私に此壺所、こ娘のそちらよ寝い、旦那様のお堅いけれど、時のはづみて、主の有池へ踏込なさりよもえれぬ、用心よの網を張えや、今夜のおれが股引をはいて寐や、むさけれどあなたよ、わしがどんさを裾よなど、追風もてくる鐘の

こへいとえんくと聞へける、およねの一人、物思ひ心よかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理よ隔られ、秋の螢の消殘る、佛檀の灯もほそくと、と嵐よふつと氣の付娘、奇妙よ治つたどし様のあの疵、今でも敵の手がし、里が知てからふの病氣では思ひも寄ず、よと心で黙頭胸をすへ、灯の消たるの天のわたへ、夫の爲と拔足さし足探り寄印籠取上立退足、つまづく音よ目覺す、十兵衛思はず高聲、何者と裾をとらへて引とむれ、わつと泣入娘の聲、平作も悔りし起上てもまつくらがり、およね、くと云つとさがす、籠の埋火付木ようつし顔見合せ、娘やないか、旦那様か何故よ此有様、何の因果で此様な情かい氣よ成たぞいやい、此親の、其日ぐらしの物じやけれどな、人様の物もじきな、か、盗もと思ふ氣の出ぬ、ぬいやい、親の顔迄穢しおつたどわつと計よ、泣居たる、十兵衛の氣の毒、顔金銀を取たといふで、いなし、是よの譯の有そふな事



と問れておよねの顔を上耻かしながら聞て下さりませ、様子有て云か  
 のせし夫の名のやされぬが、わたし故又騒動起り、其場へ立合手紙を負  
 一旦本腹有たれど、此頃いさきり痛いろく介病盡せ共徴なく立寄  
 方も旅の空、此近所では養生長しい間、路銀も盡其貢も身の廻り櫛并  
 迄賣拂ひ最前もお聞の通り悲しい銀の才覺も、男の病が治したさ、先程  
 のお咄し、金銀づくでないどの噂、燈火の消しより、ア妙薬をどうが  
 と思ひ付しが身の因果、どうぞお慈悲、是中今宵の事、此場切か年  
 寄れしお前、又迄苦勞をかけ、不孝の罪、けふや死ふか、翌の夜は、我身の  
 瀬川、身を投てど、思ひし事の幾度か、死な跡でもお前の歎きと、一日ぐ  
 らし、又日を送ると、ふぞお慈悲、よは了簡と東育の張もぬけ、戀の意氣地  
 り身を碎く心、思ひやられたり、歎きの端くつくくと聞取十兵衛  
 姉はそんなら、こなさんの江戸の吉原で至盛の松葉屋の瀬川殿じや

の、ハイ、ようは存じ、すりや瀬川殿の夫の爲、よくと心の目算、思案を極  
 め、太夫殿夫の手紙を治す薬、ほしいの尤、それ開て、進せたい物なれ  
 ど、是の人の預り物、此事の思ひ切つ、まやれ、今こあた衆の咄しの通り、わ  
 しも又恩を受た、其恩を受た人の爲、いづれの寺でも苦しうないが、石  
 塔一つ寄進が仕たいが、何と世話して下さるまいか、夫の寄特結、構な  
 寄進でござります、何時成共お世話致しませぬ、私も来年の秋、が年季  
 勤むる功德、俱成佛とやら、是非お世話致しませぬ、でござります、どう  
 ぞ今度の下り迄、進ぬ様、頼ます、頼むの願ひ、書付も此内、委しふ  
 ござると、金一包取出し、必頼んだぞや、親子の衆、最早夜明、問もなし、  
 随分無事、親仁殿と立出れば、平作も必お下り待ます、姉はさらばと  
 ばかり、よて、心よ一物、荷物、先へ道を早めて、急ぎ行跡、親子の顔、見合  
 せ、金取上て、およね随分大事、よかけておきや、夜明迄の間も有、そなた



も休みやと水いらす見廻す傍も落たる印籠、是の今の旦那のじや定て尋てござるで有と、いふよおよねが手も取て此印籠のどうやら覺への有摸様、合點の行ぬ、それか是かどよく、詠め、それよこりや澤井股五郎が常く持し、覺への印籠、不思議など平作も金取出しよく見れば、金子三拾兩此書付の、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、稚名の平三郎母の名のおとよ、我子も付て置た書付、そんなら今のお方の私が爲の兄也、我子の平三で有たかいそんから最前からの深切の、それといはず此金を買てくれた石塔代、不思議の縁と親と子は暫し、おされて居たりしが、およねの印籠手も取て、襦袢折てかけ出す、待娘どこへ何處へといとしぬ、此印籠を持て居る、其兄也の敵の手がしり、追かけて股五郎が有家を尋ね志津馬様へ、尤じやく、が我ではいかぬ年寄たれ共此平作、理を非も曲ていはして見せう、我も續いて跡から來い、どの

様な事が有てもな、必出なよ、敵の有家開迄、大事の場所、木影も忍んで立開せい、必とも能忽す、合點か本海道の廻り道三枚橋の濱づたひ勝手登へし、抜道をと、子故も迷ふ三悪道、轉けつまるびつ走り行、跡もおよねの身拵へ、續いて出んとする所へ、折柄來かゝる池添孫八、瀬川様か孫八殿、よい所へござんした、今夜爰も泊た客で、敵の手筋が知れそよな、詮議の爲も吉原迄、としぬが行まやんした、い、忝さい、其行先の、吉原迄のよも行まい、何角の様子の道まで聞んど、瀬川も續く池添も足も任せて、  
「またひ行實人心さま、町人なれ共十兵衛の、武士も及ばぬ丈夫の魂夜深も立し、獨旅、千本松もさしかる、サ、イ、と杖を力も息すたく、  
ヤ、く、旦那様、早くお早い足元、今呼だのこなたかあのだし、う何の用、只今のお金を戻しよ参しました、石塔料と名を付て、大まいの金子三十兩、其日暮しの蜘蛛助も下さるよも譯が有、又請まするよも譯が有、



けれども此金を請まして、去人が立ぬ義理がござります、是をお返し申す代りよ、あまたよ頼がござります、お聞なされて下さりますか、  
 一夜さ泊るも何ぞの約束様子よ因て頼れまい物でもないど夕闇の夜の聲えるべ跡方、頼入池添瀬川かたづを呑で聞居たる、其頼の様子、  
 、「いおつえやつて下さりませ、此印籠の主の有家を承りたふござります、是を尋て知たい計よさま、の流勞致す人、それ故娘も廓を出て、  
 憂艱難是が知ると本望成就、娘よつれて私迄、此上の悦びのござりませぬ、二十や三十のはした錢で、露命をつなぐ私が、死る迄安樂暮される程の三拾兩、其金銀よかへてのお願ひ、七十よ成て蜘蛛助が子よ叶はぬ重荷を持それのまだ休みもする、子のかわいひといふ重荷の寐た間も休まぬ一生の苦痛を助る薬の名お前様も親が有べ、子故よは愚痴よ成物じやと思し召やられて、願ひを叶へて下さりませ、エ、エ、旦那様

ど、血筋と義理と道分石、わけて血の緒の三界よ、踏迷ふこそ道理なれ親の心を察しやり、そふ有ふ心底至極尤じやが是計のどうも云れぬ、おれも頼れた男づく、其方の人が太切なら、こつちよも又太切、譬又有家を聞ても、命がなふて、本望の透られまい、そつちの内よ落して置た主のない印籠の、其妙薬で疵養生達者よ成た其上で、望の叶ふ時節も有ふ、親仁殿、そふじやないかど心のかけご一重明ぬ十兵衛が、情の詞、それ程は慈悲の有か方、逆ものところ、其薬の持主、悪い合點此薬の持主、其病人どの大敵薬、三十兩の其金敵の恩を受まい爲、戻したで、ないかいの、此持主の名をいへば、敵の薬で疵本腹恩を請て、いませさかの時、切先がなまらふぞや、やつぱり拾ふた薬よして心置なふ養生さした、が、よさそふと思ひる、と聞て平作感じ入、そふじやあつた、エ、お前様の、恐ろまい發明なお人じやの、そふ聞まして、申様もござりませぬ左様



ならもふ歸りまゝよ、旦那様、おさらばと云つゝ探つて十兵衛が脇差抜  
 取腹へぐつと突立る。ヤ、何とした、自害か、何故、誰を恨で勿  
 体なやと、うろく、涙、娘、手當る池添が泣音と、むる、響虫草よ  
 喰付泣計、平作苦しき目を開き、かりやこなたの手よかゝつて死るのじ  
 や、いの、こなたとおれとの敵同士、志津馬殿、縁の有此親仁を  
 殺したれば頼れたこなたの男、立、此上の情、平作が未來の土  
 産、敵の有所を聞して下されいの外、聞者、誰もあ、今死る者、遠  
 慮の有まい、不思議、始て遇た人、どふした縁やら、我子の様と思ふ物、何  
 のこあた、引氣取らず様な事、此親仁が致しませうぞ、是が一  
 生の別れ、一生の頼み聞す、死で、迷ひます、いの、拜ます、  
 旦那殿と、子故の闇も二道、わけて、命を塵芥、須彌大海、もまさつたる、  
 賊の親、始て逢、名乗もならぬ、浮世の義理、孝行の仕納め、どこ、誰が聞

て居まい物でもなければ、十兵衛が口からいふ、死で行こな様へ、餓別  
 今際の耳よよふ聞つしやれ、股五郎が落付先、九州相良、道中筋、参州  
 の、吉田で逢た、人の噂、忝い、聞たか、誰もない、聞た  
 の、此親仁一人、それで成佛、仕ます、いの、名僧知識の引導、前生の  
 狀子が介抱、受思ひ、残す事、ない、早ふ苦痛を留て下され、親子一世の逢  
 初の逢納め、親仁様、兄、顔が見たい、顔が見たい、わい、南無わ  
 みだ佛、なむわみだ、唱る、十念、十兵衛が、こたへ兼たる、悲歎の涙、  
 始終、窺ふ、池添が、小石拾ふて、白刃の金合す、火影の親子の名、残跡、見捨  
 て、別れ行

○第七 關所の段

藤川の新開と人よ、云と影の郷、一村籠る、松影、茶屋の娘のお袖とて、  
 年の二八の跡や、先まだ内證の白齒の娘、雪氣いとの、寒空、水の出花



や煎じ茶の佛をたじふ參詣人黒谷の上人銀倉へ下向の道山中の法僧  
 寺よけふで三日の御逗留御符は札のお影みて瘡が物云ふ龔が治る膝  
 行のお祖母が禮參り御禮參りの三人が茶屋の床几は腰打かけ何と太  
 郎兵衛きつい人群集の扱皆聞えやれは符のお影で奇妙な事がござる  
 吉田の宿の搗栗屋といふ炭屋の子が痘瘡で目が潰れ何が一人子の事  
 故夫婦の衆が發心して罪亡しよ西國も出る所へ上人様の立寄何が  
 符を戴くやら聞しやれ其夜から目が明ましたといのそれから吉田  
 中がひつくりかへし山中がお泊り故毎日の參詣人有がたい事でない  
 いか、そりや其筈いの炭屋の子なら黒谷様も縁が有、こちらも  
 逝で縁の有、かすが焚たは符を戴きませうと打笑ひ我家く歸り  
 ける父の教を守らざる共罪科の降積る雪氣の空もいとひなく姿を略  
 す和田志津馬敵の行衛知されば空しく過る光陰のやたけよ心關所前

姉様最前々此茶店で待合す躰の人の見へなんだか、よく左様なお方  
 の見受ませぬ然らば暫しと腰打かけ姉様此遠目鏡の往來の慰みか、よく  
 く慰みでいござりませぬわたしがとく様、此關の下役人若切手なし  
 ぬ抜道を通る人が有ふかど吟味の爲の此目鏡と聞て志津馬が心の當  
 惑差當つたる切手の用意、どうがなと思案顔、お袖の一心志津馬が顔  
 よい男と思ひ初云たい事も娘氣の口へ出兼る茶の花香顔を詠めて  
 汲手元脇へ流すも氣もそる茶碗計を手よ持て差出す心の思ひくの  
 汲で知かし目遣ひも相手よ蒸氣が有べこそ是のきついほ馳走餘り茶  
 又福が有然らば今一つ迎もの事よほんまの茶をいくつもく吞たい  
 ど思はぬお茶の捨詞お前故なら何度でも入花を上たいと何と云寄方  
 もなく顔の上氣の初紅葉男の潔粹一森又戀の出花と見へよけり志津  
 馬も扱いと心付我よ心をかけしこそ幸切手の手がくりと心で黙頭す



り寄て、お娘頼たい事が有何と聞てくれる氣かと、思ふたつぼへ和ら  
 かよ、云かけられて返答の詞も詰るが女子の情何と返事の云様も、わた  
 しもお前も頼がどの様な事なりと頼と有べ引のせぬ、忝い、わたしも  
 お前故ならべ、どの様なお頼でも、いとひのせぬと寄添へ、それ聞て落付  
 た、何を隠さふ、我身の上今夜中よ此關を通らねば我一命よかする事、こ  
 なたの覺し拔道を何とぞ教へて貰いたい死でも忘れぬ、頼むと色で  
 仕かける我身の大事さつとまむれば、まめかへし耻しいやら嬉しいや  
 ら抱付てのまめかへす、袖の人の關の門幕六つからは通路ならずそ  
 れ迄よ私が働き、若間違へわたしがお供し立退ん、必氣遣ひ遊ばすなと、  
 思ひ合たる他生の縁二人が望の二道の、一筋道を、急ぎの道中狀箱刀よ  
 括り付通りかゝればお袖の呼留お飛脚様お休みと、いへば奴が立とま  
 り、呼がけられて姉様も耻かしてよいものか、まだ八つよの間も有べ

一ぶくせいと腰打かけ、まんどや、お客様御免なされといへ  
 ど志津馬も何氣なふお飛脚はどれからお立、下拙の鎌倉扇が谷の四  
 つ辻切通し、夜前濱松泊り日が短くて漸爰迄と、聞か志津馬の心當りだ  
 まして問んと傍よ寄扱、早い事、私共の何として、浦山しい足元  
 ど、咄しを盪よ茶の出花、一目見るも餘念なく、お袖が傍よぐよやと成、  
 忝い白齒娘のお初穂、一口吞す氣のないか、一目見るから戀茶と成た、  
 奴殿悪ちやり置んせ、ちやの、どちやよ入まい、こちやすつとほんの  
 こつちや、くそつちや向まいどうちや、去どの貴公も顔も似  
 合ぬやつし形、名の何と云ます、身共が名の助平、いもふ飯も好物だて  
 や、お娘どう仕てくれる、まやら、そんな事より此様お面白い  
 物見る氣のないかと目鏡の傍へ突やられ助平の差覗き、面白いと  
 詠め入、大勢人が見ゆる、向ふよ見へる、あれのおらが仲間の頭



だ、コレ頭何ぞ用のないか、何じや金比羅様の挑灯も有、三川が見へる、何じや藤屋の二階で客が樂しみよる、味い事、あの女の見た様なり、れだ、わびやあきのでないかと、一目見るより屹相かへ、儂のく、うもおれは退状おこしうこよ樂しんで居るな、云か、した事忘れのせまい、旦那へ願ふて奉公引し女房も持と思やこそ春からも壹歩遣三歩やり四歩遣る女房じやと思やこそおらが切米打込で遣たぞよ、其折おらよ何と云た、お前と夫婦も成て夜も盡も樂しもといふたじやないか、それは何だ、我見る前で尾籠千万其男と抱れて寐るか、よくもおらを欺したな、鎌倉で人も知たる、澤井殿の家來澤井助平もふ了簡か成ぬわいとかけ出せしが、今の何所だ、何だ何よも見へない、だど、いふよお札がさし覗き、吉田の茶屋の二階爰から一里も有所腹立あさるだけが損もふ了簡なされ、いか様言へ一理有遠方から悋氣

するの盤も耳とらするよ同じ、どの言ながら残念と又差覗き現も成、是幸扱の澤井の家來よなど、志津馬の邊も氣を付て狀箱の封押切一通奪取元の如くよ直すのも、知ぬ助平一心不亂打眺め、口中を契りする、こりやもふ堪忍ならないとお袖が腰を力草、放して下さんせ、何と是が放されう、と古木の如く、えやちり返り横もどつさり朽木倒し、登詰たる奴風巾糸目の切しごとくなり、傍も落たる紙入の中より出る關所の切手、見ろよお袖の飛立思ひ、嬉しいやら強いやら結ぶの神の此切手と、志津馬も渡せば懷中し、我身の難義の遁れたが、かうして置れぬ奴殿、虫腹か癩癩病か、顔へ共水吹かけたよ、いふよお袖の狼狽て沸返たる茶釜の茶、天窓へさつぶり打かくれば、胸り氣の付助平が邊り見廻し起上りさも苦しげと聲揮ひし、どなた様か忝い生れ付て、始めが虫早く、時くおこる泡瘡子も湯がかつて助つたと咄せば二人の



顔見合せかかしさ隠す計なり、時も違へず關所より、打拍子木も助平が、  
 一つ二つと指折て、ゴヤ七つの時かひり大切の此状箱一時も早くお届  
 やさん、關所の切手と紙入の内を捜せど、ハチめんよふか、南無三寶跡の茶  
 店で落したか、ヒト一走り立出れど、水氣取れし河童奴ふならくと、池  
 水のこみよ逢たるごとくよて元來し道へ引返す、お袖の跡を見送りて、  
 此間よ早ふと茶店の道具を門内へ運ぶ片手よ顔詠め見飽ぬ目鏡の戀  
 男、志津馬の一心敵の手がしり白齒娘が手を引て岡崎さして歸りける、  
 鎌倉の奥女中お里歸りの道中と、人目よ見せる紙乗物關所の前へ昇居  
 る、家來お傍へ立寄て、お關所でいへば暫く是より歩行と、聞とひとし  
 く戸を開き旅姿に身を省し兜頭巾よ目計出し、昨日よかひり勢も淵瀬  
 と澤井股五郎送り見廻し、ゴヤ駕籠の者太義で有た是を早く歸てたもれ、  
 林左殿何してござるな、あれへは出でござります、お旦那よのお先へ

お通りなされませ、木よもかやよも心置の世話人の志無足よせぬ我  
 心底譬我を付ねらへばとて何程の事あらん見付次第よ返討わいらも  
 ちつ共氣遣ひすなど、家來引連打通る、此海道を住家とする蛇の目の眼  
 八、人喰馬よ櫻田が手よ入顔よ先よ立、ゴヤ蛇目、今咄した事男と見込で頼  
 ひぞよ、何で有ふと見付次第よ合點か、ゴヤ親方氣遣ひさあんか、此蛇の目  
 が見入れたら一寸も動かまやせぬ、ハチ氣味のよいやつと、紙入より取  
 出し、金子千疋手よ渡し、當座のはうび納て置さ、ゴヤ忝い馬士よ千疋と、  
 仕合せよしの此蛇の目、何で有ふと見付たら、皆撫よする一とつはと、祝  
 ふさい先林左衛門、晩の泊りで何かの事、まめし合さん、ハチ來いと、門内さ  
 して入相の、鐘諸共よ關の門門はつしとまむる音宙をかけたつて政右衛  
 門、關所の前よ立寄、ハチ門戸かためて出入もならず暮時でわからねど、う  
 しろ、姿の林左衛門よ違ひなし、ゴヤ股五郎を同道よ極た、ハチ付込だ敵を



取逃せしか口惜やどはがみをなしてみをもだへ門内を白眼付無念涙  
 多く居たる、それよ、志津馬と愛で出合約束但し先へ入込だか何よ  
 もせよ出合所の一筋道、今夜中よ此關越ねば、最早敵の手よ入ぬと行つ  
 戻りつ思案を極め、兼て聞居る抜道の慥よ竹の林の中、押分行ハ川づた  
 ひ、探り廻りしまつくらがり、うろく、眼よ助平が是も窺ふ抜道を、すか  
 し見れば雲つく様な大男、胸り驚き身を忍ぶ探り當りし政右衛門竹藪  
 押分、忍び行、どつくど見届け助平が状箱腰よくしり付、味いくど抜道  
 の跡を慕ふて「急ぎ行不敵成かな政右衛門天よ一命投打て、目さすもえ  
 らぬ眞の關降來る雪の道踏分、裏道つたひ一丁計行よと見へしが、關所  
 の内よ聲高く忍びの鳴子の音する、裏道を越る山者有と、呼られ、そ  
 れ遁すなど捕人の人數兼て用意の高桃灯、人數を配つて取巻しの危ふ  
 かりける、次第なり、政右衛門の事共せず三角よ眼を見開き、山を食する

猿松め、皮引ばいでくれんすと、だんびら引ぬき待かけたり、それ遁すな  
 ど組子共、一度よかゝる四方詰、よこまやくなど振ほどき付入所を宙よ  
 て切取飛くる熊手を受流し切立く切立れば、詞よの似ぬ組子共、跡を  
 も見ずして逃ちつたり、逃るを追す政右衛門、道の案内ハ此挑灯と、勝手  
 覺へし柳道の足跡あるべよまたい行、跡よかくれて助平ハ道の勝手ハ  
 方角知らず、うろつく折柄取て返す組子共、それといふよも及ばいこそ  
 高手小手よくしり付、狼狽奴と夢よも知らず、組子の頭大音上、強敵の曲  
 者を、組子仲間へ生捕たりと引立てこそ、急ぎ行

○第八 岡崎の段

世の中の苦の色かゆる、松風の音も淋しき冬空や霞交りよ、降積る軒も  
 まばらの放れ家へ、岡崎の宿はづれ、百姓ながら一利屈主ハ山田幸兵衛  
 と人も心を奥口の障子隔て女房が、積車の夜職歌いとし殿を、三河の



澤よ、戀の棧み杜若更て忍べ、夜に八つ橋の水も洩さぬお手枕部も都  
 も小娘の誰敷へねど、戀草を見初惚初打付よ雪の夜道の氣さんじり互  
 り手先折添る傘の志津馬もつれ合ふじやらくら咄しいつの間も戻  
 るお袖が我家の戸口、まんき、いつもの遠く覺へたよ、意地悪ふ今夜の  
 早さまだ咄しが残て有跡へ戻て下さんせぬか去迎の譯もない日の暮  
 る草臥足跡へも前へも雪の段鉢の木の焼火も暖なそもじの肌で暖め  
 て貰ふがほ馳走早ふお宿をほ無心とぢやれた詞よとふいふて、よいか、  
 悪いか白齒の娘、聲聞付て誰じや、く、か、様、わたしじやないな、  
 お袖とした事が、此寒いのは何して居やる戻りが遅さよ待兼た、早ふ還  
 入やど、母親の詞を煎よ内へ入、どふ歸らふと思ふたけれど道連のお方  
 が有て、それで思はず夜よ入ました、と、道連のお方と、行暮した旅の  
 お方それの、く、さついは難義、今宵一夜のこの内よ留て上て下さん

せ、や苦しうござりませぬこつちへお這入遊ばせと、呼ばれて志津馬の  
 おづくと、小腰屈めては赦されませ、獨旅の浪人者、日の暮る足は損ふ  
 詮方盡て此お頼、近頃わりない事あがら、一夜のお宿をほ無心と、いふも  
 心よ荷物の葛籠お袖見る、ゆか、様と、様の旅葛籠あそこよ戻つて  
 有から、親仁殿もけふ暮前歸らしやつた旅草臥で寐てじやないの、  
 遅ふても大事ないよ、早い事やど其跡の、言ぬ色目を見て取母、日頃か  
 ら二親がちよつと出ても、戻りを案じる孝行なそなた、とふやら不興な  
 顔持のかたい爺の氣質故折角お宿を借ませふとお供仕やつた道連  
 様へ、約束が違ふかど案じ過ての事有ふ、譬爺の心得でも、此母が不  
 得心なせといや、今でこそ茶店の娘、去年迄の鎌倉のお屋敷方へ、必奉公  
 の主人様のお差圖で、去武家方へ、未くの縁も付ふと堅い約束、其言、  
 夫を嫌ひ無理隙貫ふて親の内へ戻つて問もあふみだらが有て、以



前のお主計じやない顔のしらねど約束仕た蟹殿へどの顔さげて云譯  
 せん、斯いふいふ物のそなたは限り、そふした事の有まいけれど、時  
 分の来た若い娘の有内へ若い男、一夜の愚半時でも、ひとつ所は兼伏せ  
 ば戸の立られぬ人の口、其上連合幸兵衛殿、國守方のお目がねえて、新關  
 の下役を勤まつしやる今の身分、常の百姓との違ふて、物事を正しらす  
 るも役柄故、必悪ふ開やんなやと、いわれて何と返事さへ、お袖が異見の  
 相伴、志津馬も手持投首を見る氣の毒さ母親も、さのみいいかと何  
 氣なふ、此様は異見するも轉べぬ先の杖とやら、イヤは浪人様、お心よさ  
 へられて下さりますな泊ます事ならずともせめてお茶など入花を  
 一ツ上ふと尻輕は勝手へ行間待兼て、娘のかづく、志津馬が傍誰も來  
 ぬ間、云残した、咄しの残り納戸でと、取手をすげなく振放し、見る影  
 もない旅の者、關所での情といひ、道すがらもあな嬉しい、詞を誠と思

の外、云號が有からん主有花は落花、狼藉密夫など重て置て、四つよ  
 間も有まい、夜の更ぬ中宿取て、寝て花やると立上る、袂は絶り、ヤ、あつ  
 て過たる縁定め、今更とやかうかす様、今の詞がお心よさいつて私へ  
 當言と無理と、いさら、思ひねど、恥かしながらけふ迄も、殿は惚た  
 どいふ事、知らぬ、おどないふつ、いかな、在所育の此身でも結ぶの神の  
 利生で、お顔見るから思ひ初ど、ふぞ女夫と成たいと胸のまがらむ白  
 川の關の越ても、こへかぬ、戀の峠の新枕、かひさぬ中、又願欲な、つれな  
 い事をいふ手間で、つい可愛と一口、云れぬかいなどすがり寄、まども、  
 涙のかこち、言岩木ならね、迫も、振拵がたき戀の跡、かゝる折から門  
 口へ、いさせき來かゝる蛇の目の眼八、お袖の目早く、一間の内、無理と志  
 津馬を忍ばせて、何氣ない顔、入口から差覗いて、味いぞく、毛虫の親仁  
 や母者の居ず、お娘一人、ない圖な首尾と遣入やいな、後から、帶際ほ



ふと引だかへ常から目顔で知してもびんじやんく、驛廻る馬がかれ  
 が太鼓のふち立城で驛見付た様も、さんばい仕兼て居るのい、いや  
 おふあしよちよこく、と撃でかくれとえあだるれば、穢あいうるさ  
 いしやらしいと、突付られても押強く、誰でも初てのいやくど口で  
 云が、かさ汁と色事の味覺へてから止られる物じやないて、それ共いや  
 ならおれも意地じや、今夜藤川の關所を破つて、忍び道を通たやつ、召捕  
 よふと岡崎中の上を下へと詮議のどふ中胡蓋なやつとの相合傘ちらり  
 どつないだ此眼入灰汁で洗ふた蛇の目が詮議ほへ頬かゝしてこまそ  
 ふとかけ入向ふへ立ふさがる、お袖を突退立切り、障子引明見て恠り、こ  
 りや違ふたと狼狽眼かけ出す蛇の目が利腕捻上立出る主の幸兵衛百  
 姓なれど新聞の下役をも相勤る、身共が居間へ泥脚を切込狼藉やつ了  
 簡ならぬ所なれど、所存有故赦してくれる、此以後きつと嗜おらふと、投

付らるゝと思の外、突放したる手強さよ、底氣味悪くうぢくもぢく  
 見るよお袖が嬉しさど、いとしい人の納まりを心一つよとやかくと案  
 じ彌増思ひなり弱みを見せぬ悪者根性、いへよべつたり上股打役目  
 役目と云るゝが、其大切な關所をぬけた科人を吟味する最中に爰の娘  
 が連れて戻た旅の侍、引込で置ながら、詮議する此眼入、なせえめ上て手ご  
 めましたのじや、娘が連立歸つたと、其侍の何國も居る、ナ、慥さつさ  
 よ爰の内へ、だまりおらふ、お袖よりつほれ最前方法外の有様、承引せぬ  
 故無法の當推よし又其侍とやら此内へ来たよもせよさ、鎌倉通行の東  
 海道數限りなき旅人の往來、是ぞと云べき證據もなく、侍とさへいへば、  
 悉引どらへ關破りと云べきか、勿論儂の當所の馬追、誰赦しての詮議呼  
 べり、長居ひろがべくし上、地頭へ引立ふか、何とくときめ付られ、  
 ぞやく、お氣の短ひ、商賣が馬方だけ、豆から發たいさこさで、親仁様の



要所迄、踏馬ふみうまは免まぬとへらず口跡くちあととも見ずして逃歸にげかへれば跡見送りて落付おちつき娘忍むすめ志津馬しづまも一間を立出たてだ、覺おぼなき身みも關破せきやりど、今の危難きなんを免まぬれし、  
 此こゝ享主きやうしゆの厚志こうし故ゆゑ添たなしと手をつかへ禮れいの詞ことばも是こゝは痛入いたみい先まづく  
 手を上あられい、さ、ひらよ、承うけたまわれば浪人なみのりと定さだめて仕官しぐわんのお望のぞみで上  
 方へござるのかい、さ、く撥子はくし有あて世を忍しのぶ獨旅ひとりたび、則すなはち當所あた岡崎おかざきまで山田幸  
 兵衛殿方へ密ひそか參まる浪人者なみのりものと聞きて不審ふしんの眉まゆも皺しわ、其山田幸兵衛そのやまだゆきべゑとい身  
 共が事こと、其元もとの何方どこから、さ、貴殿あなたが幸兵衛殿ゆきべゑと云いふ拙者せつしやの鎌倉かまくらの昵近ちぢ  
 武士澤井城五郎殿ぶしさわいじやうごろう縁有えんあ者もの委細いさいは是こゝと藤川ふじがわまで手ても入い一通手いっとうても渡  
 せ、封押ふうおし切きて老眼らうがんもつぶ、讀よも口の内くちのうちに様子ようす知しねば氣遣きぢふお袖そで幸兵  
 衛べゑとく、讀よ終しまり、某それがしが性根しやうねを見込みこみ、和田行家わだけいさを討うて立退たてひ澤井股五郎さわいぶたごごろう  
 が力ちからと成なてくれよと有ある頼たのみの書面かきま、此こゝ趣先おもむ達たて鎌倉かまくらの様子ようす承うけりし砌まじ  
 へ待まちたる此こゝお頼たの慥しん承うけ仕つかた、遠途とんじゆの所ところは太儀たいぎ、此こゝ使つかを勤つとめらる

る其元もとの城五郎殿じやうごろうの家來けらいかど尋たづねる詞ことばの敵たの手筋てしん是こゝ幸ゆきと氣色きしきを正ただし  
 幸兵衛殿ゆきべゑの懇切こんせつ承うける上うへから何なにをか隠かくさん某それがしこそ、刀やいばの遺恨いん止事とど  
 を得えず和田行家わだけいさを手てもかけし澤井股五郎さわいぶたごごろうと申ます者ものは自分じぶんが股五郎殿ぶたご  
 かいにかよも左様さやう鎌倉出立かまくらだて致いたせし折せきの澤井股五郎さわいぶたごごろう附人つひびとも數多あまた有あ共とも人目立ひとめだ  
 もいかいと存ぞんじ別わかれ、罷登まかりのぼる城五郎殿じやうごろうの前まへもつては懇意こんいの幸  
 兵衛殿べゑ、何なにとぞは助力さしけ下くださらば、此こゝ上うへもなき拙者せつしやが悦よろこび、さ、すすれば貴殿あなた  
 が股五郎殿ぶたごか、是こゝ存寄ぞんじぬ、是こゝ迄いた互あまは意得いぢねば双方ふたはた共とも知しぬ同士どうし  
 娘むすめ云號いひなづけの御殿ごてんじやいやい、そんなら私が鎌倉へは奉公ほうこうの其中そのうちも、  
 城五郎殿じやうごろうのお勸故すすめごと、其方そのかたを遣つかひさふと面談めんだんの及およばねど約束やくそく致いたした  
 花御殿はなごてんよふこそ尋ねて下されたど、悦よろこぶ聲こゑの洩聞もれきこへ、母ははも立出たてだ、さ、思おも  
 ひがけない、こゝ様さまが御殿ごてんで有あたかいのふ、またが氣きよいさへて下され  
 な、云號いひなづけの有あながら、股五郎ぶたごと云名いひなを嫌きらふて、今迄いま娘むすめが不得心ふじやくしん、それ故疎遠そとん



又打過せした、聞たど違ふて、よい男、此様な御殿でも、そなたのやつぱりいやかいのふ、勿躰ない事云しやんす云號の殿はじやと、今の今迄まらいでさへ、添たふてならぬ物、縁の切てもお主のお差障、どし様やか様のお救しの出た股五郎様わたしが何の嫌ひままよ、二世も三世も替らぬ夫もふく、是からどつちへも、やまます事じやとさんせぬ、いつ迄も爰に居て可愛がつて下さんせと、心よ思ふ有たけの言で思ひを押包お袖が嬉しさ二親も俱もほたく、悦び顔思ひがけなき言號の噂よ、志津馬の成程く、上杉に仕官の中、城五郎殿お素圖よて、顔のまらねと言號のお袖殿で有たよな、一方ならぬ股五郎が一世の大事よ及ぶ時節はかくまひ下さらば生く世の厚恩とわざと其身をへり下り、詞を盡し頼むよぞ、何が扱く、狩人すら懐又逃入鳥の助るならひ、まじて御殿違背のない年こそ寄たれ幸兵衛が命よかけてかくまふからん

志津馬づれが付ねらふ共何程の事かわらん、去ながら爰の端近幸奥よ別家も有べ、心置なく打くつろいで、女房娘希の珍客何のなくと盃の用意を仕やれ、其お心遣ひ返つて迷惑、御殿の他人がましい身入やら聲入やら祝言もごつちや煎の在所料理みしり肴の舟盛より外よ馳走の手いらすの娘のお袖が初物一種て、いか様祖母の言やる通り敵持の御殿よ七十五日生延るとい、是も吉左右目出たい、案内致さよとおどけまじりよ先よ立親の手前を恥らひて赤らむ顔の色直し解て、見せても下心赦さぬ志津馬が肌刀胸よねた刃を相の間の襖引立入よける、既よ其夜も、まんと遠山寺よ、告渡る早九つのかねてより、内の案内の知たる眼八、裏から忍んで納戸口、思はず躰明がらの、駄荷の葛籠を幸とあたふた押明忍び込、鼻息もせず窺ひ居る、斯とい人も白雪の道もいとぬ政右衛門、心も關の忍び道通れて、急ぐ跡も敷



多の捕人が見へ隠れしたふ足跡氣轉の唐木、兩腰そつと道端の雪掻集め押隠す透もあらせすばらく、腕を廻せと追取巻、子細もいらず理不盡、又繩かゝるべき覺のないと云せ、も果ず双方、捕たどかゝるを引ばづし苦もさく首筋一掴み、一振ふつて右左弱腰蹴すへて獨投透間を得たりと二番手が腕がらみを振ほどき、ほぐれを取て真逆様頭轉胴骨雪道、又打付られて叶のじと、入替つたる三番手打込十てい、かいくいり脾腹をてうと真の當勵しき手練、又さしもの組子、さうなくも寄付ず跡じさりする計也、見兼てかけ寄捕手の小頭、上意、又よつて向ひし我、手むかいなすの關破りの浪人者、又相違のあい腕を廻せと詰かくれば、鹿忽也、お役人急用有て此ごとく夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を、關所を破りし浪人との身、又取て覺へぬ難題、外を証議なされよとちつ共恐れぬ、丈夫の振舞、始終を見届、幸兵衛の戸口をかけ出押、隔憚りあ

がらお役人へ、上る、關破りの証議、半深夜、一人歩行の旅人、疑ひのほ尤併此者の鎌倉飛脚、子細有て此幸兵衛よく存じ罷有の慮外の段のほ用捨有、無難、お通し下さらば有がたき仕合と、かばふ詞、又政右衛門、おさいふ、こなたの何人ど、いふを打消、イヤッ、身、又覺へ、あいよもせよ、お役人、慮外の手向ひ、又、不屈至極と、呵り付まづ、と歩み寄倒れ伏たる組子共、引起して死活のいけ、いづれも、お心慥みとさるか、お役目、苦勞千万と、苦い挨拶氣の付捕人、幸兵衛、猶も威儀を正し、承、おれ、關所を破りし科人の帯刀の浪人者、彼の町人、此丸腰、憚りながら、人違へ、かよふな儀、又隙取中、彼曲者を、取逃さば、詮なき事、早く、お手當なされよと、云れて、實も、捕人の小頭、お其方が存せしと、詞、又相違も有、まゝい、是、お山手へ、かゝり、彼曲者を、詮議せん、家來、參れと、引連れて、元來し、道へ、引返す、影見送つて、政右衛門、危ふき場所を、遁れしも、全貴公の御厚志、故、お



禮の重ねて、心もせけり失禮ながらお暇すと立上るを暫しと止め、昨今なれど折入てお尋ねや子細もあれ見苦しけれと拙者が宅へ暫時ながらと老人の、詞に是非なく政右衛門然かば免と打通れり門の戸引立主の幸兵衛傍近く差寄て、多勢を相人よ今の働き感心の餘り役人を欺歸し、難義を救ふの身共が寸志、それ付ても不審きは貴殿の柔術正しく拙者が流義も同じき神影の極意、手練せられし旅人のごいふかる色目、こなたも不審神影流の極意なりと見極られしは老人、心憎しと双方が、ためつすがめつ見合す顔、お別れやまて十年餘り、相好の替られしが、生國勢州山田にて、武術の指南下されし要様ではござりませぬか、其詞で思ひ出した、我勢州は有し節幼少より育上り庄太郎で有ふがな、成程、然らばあなたが其方が、是れと手を打て、盡ぬ師弟の遠州行燈掻立、打詠め、稚顔も見覺有庄太郎も相違ない、健

生立し、先生も堅勝で、無事の對面互に満足、去ながら、思ひ廻せば、過行月日、其方の山田の神職荒木田宮内が、幼少の砌父母は離れ孤となる不便さ、手搥にかけて育つる所、稚立方武藝を好む、未頼もしく思ふ、門弟共へ稽古の次、一手二手と教ゆる中、一を聞て十を知頼智といひ器用といひ、十五以下にて、鎗術、劍術、鎖鎌、柔術に至る迄、諸歴の弟子を、追拔、神影の奥義を極むる無双の達人、何卒大家へ仕官致させ、親の氏をも繼せんと心頼みと思ふ中、未熟の師匠と見限りしか家出致して十五年、便なけれり折り觸れ此庄太郎のいかなりしと、雨よつけ、風よつけ思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄そちが、今所の何國有付とも、あらざるかと師匠の慈愛も、政右衛門思はずはつと手をつかへ親にも勝る大恩の、師匠を見限り家出せしと、疑ひの去事なれど、常く武術の講釋、小耳も覺ゆる其中、一派も心を



疑さんより諸流又渡り修行をなすこそ、此道の心がけとて教訓、心魂よ  
 志み渡り十五才まで國を出普く諸國を遍歴し、武術を磨く武者修行天  
 運ふ叶ひ然るべき主取も致せしかど、生れ付たる好色者、乱酒も主人の  
 機嫌を損じ、只今の元の浪人たよるべき方もなければ、若上方も有付も  
 やと心ざして参る所思ひがけなく、先生も面目もなき對面と、うかつも  
 それと身の上を、言ぬ底意の白髪、の母、様子聞てや、一問を立出、庄太郎  
 か、成人仕やつたの、連合の眼鏡も違ひぬ、武藝の上達、器量を見込で頼  
 たい子細が有と聲をひそめ、そなたの家出仕た時の三つ子の、お袖も  
 ふ十七も成り、いの縁有て言號の其御殿を、親の敵と付ねらふ者が有故  
 まさかの時の後、精力も成て下さらば、餘の人千人萬人も勝つて嬉し  
 う思ひます、いかにも、庄太郎と知ぬ先、難義を見兼救ひしも、其義  
 を頼まん下心と、師匠の詞聞もあへず、政右衛門摺寄て、其付ねらふ敵

の假名の、聲といふの上杉の家來、澤井股五郎といふ侍付ねらふ、和  
 田志津馬と聞た計面體の知ね共、高で知たる若輩者、幸兵衛が片腕も  
 足ぬ相人、爰一つの難義といふのきやつが、姉御唐木政右衛門といふ  
 やつ、音も聞へし、武術の達人、壁五十人百人加勢有とて、政右衛門より及  
 ばぬ、まだしも唐木も立合ひ、其方ならで外もない、何とぞ聲も  
 力を添助、太刀頼む庄太郎と、餘義なき頼も、政右衛門、先生も内縁有股五  
 郎殿も力を添れば、少しの師恩を報する理り、いかにも助太刀仕らふ、  
 此上の澤井殿の隠れ家へは、案内とせき立、唐木忍びの眼八蓋押、明て差  
 覗く影をちらりと見付る幸兵衛、心付ね、嬉しや、庄太郎の今の詞  
 聞たから、千人力、よく聲殿へと立上るを、扱いらざる女の差出、股五  
 郎殿の行衛の知らぬ、壁も耳有世の謎、それと慥に知ね共、云聞す、  
 折が有ふが、うかつもそれと明されぬ、咄しの蓋は取ぬが秘密と、どこや



ら一物歩行の小助門の戸叩てゆく、庄屋殿から急き用、只今出と  
 とんきよ聲、又開破りの詮議で有ふ、いやといわれぬ役目の不肖と、云  
 つく羽織引かけて、たしなむ大だち差こなす、腰もかゝみし海老鉈を葛  
 籠よまつかど、女房今も云た咄しの蓋戻つて来る迄明ぬ様心よあろ  
 した此錠前、台照かど詞の謎聞女房も解やらぬ、雪道いとぬ高足駄、さ  
 す傘の骨組も人よ勝れし五調作り、あるきを先よ幸兵衛の心を「残して  
 出て行戻らしやる迄寐られもせまい、糸織ながら咄しませう、今よ上  
 上根な事、火よお當りあされませ、私も是から下男同前よ、お遣ひなさ  
 れて下さりませ、何のいのかな様の大事のお客、煙草吞でゆるりつと、  
 寐轉んだがよいわいの、いよく勿体ない師匠の内、此煙草のどこから参  
 つた、親仁殿が旅戻りよ貰てござつた上方煙草、あなたのお口よ合  
 のなら、服部か國分か、此天氣よ斯して置たら濕りまえよ、留主事よ刻で

見ませう、幸爰よ切登庖丁、底よ劔の葉拵へ、敵を開出す煙草の小口、葉巻、  
 手早くさりくど、大の體を小廻りの奉公ぶりも哀れなり、外に音せで  
 降雪よむざんや肌も郡山の國よ残りし女房の思ひの種の生れ子を抱  
 てはる、海山を、たどりく、岡崎の宿、先よ日の暮て、何國を宿と、  
 定なく、がりと轉ればわつと泣子をすかす手も、冷氷る、雪の蒲團よ添乳  
 の枕、いんのこくく、友さそふ犬の聲く、夜廻りの番が見付る小挑  
 燈、軒下よ何で寐るの、さやきりく、いけど、呵られて、私に秩  
 父坂東廻る順禮、お中を痛めます、ちつとの間置えやつて、順禮で  
 も幽霊でも在の中に寐さす事、あらぬ、意地ばる、猶胡蓋者、棒い  
 た、くなくと挑燈突付見るつまはづれの尋常さ、白眼んだ眼うつかりと、  
 細目よ明る戸の透間、内から覗く夫婦の縁、思ひがけなき女房お谷、ハッど  
 恠り差合せ包我名の顯れ口、悪い所へ切かけた煙草の刃金、胸を刻むと



人知ず見見た所が小盗する風俗共見へぬ此雪も乳呑子かへて難義  
 玄や有何所ぞ後生氣な所を頼んで泊て貰えやれ、見れば見る程比  
 合なるゑい女房一人寐さすの殘念なれど此方も寒氣よどぢられ、瘦畑の  
 鬼灯でおつたら物を見逃す事と、謠き歸るも頼みなき人の詞もせめて  
 の頼、火影をカ戸口よ這寄、幼い者を連た順禮でござります、お情よ今宵  
 一夜さ、お庭の端よと計めて寐よ、苦るしむ息切の聲よ主の涙もろく、い  
 としや寐持そふな門中よ寐ていたまるまい、泊てまんまよと立て行、な  
 む三寶と裾引留、是の又は鹿相千万、此お觸の殿しい中、殊もお役柄の  
 此内、何所の者やら知もせぬよ、めつたよ引入、跡の難いどふなさるゝ、急  
 度よしよなされませ、夜中よ一人歩行女子、ろくな者じやござりませぬ  
 戸を明すとばい逝したがよござります、いか様のふ、親仁殿の留主の中  
 の用心が肝心、コレ旅人、いとしけれど一人旅を泊るゝは法度は城下の

中の軒下よも寝る事のならぬ程よ、宿はづれの森の中へ往て寐やまや  
 れど和かよ言て引出す糸車、來いと云たどて行れる道か道の四十五里  
 波の上、どこへ行ても一人旅の泊てくれふ様もなしはるゝの海山  
 も、此子の顔を且那殿よ、見せたいと思ふ精力で産落すから此已之助、漸  
 思も明や明す國を立てついで一夜さ、家の下で寐た事がなければや身の  
 ならわしと山寺の鐘が、おれに寝る事よして屋の光りを燈火と思ふて  
 寝入と今夜のくらす、氷の様な此肌で、寝苦しいの道理じやないの、殊更  
 痛で乳のはらす、雪よ寒雨ようたるゝ、つらさの骨よこたゆれ共且那殿  
 や弟が敵を尋る辛抱のまだゝゝこんな事での有まいよ、其艱難よく  
 らべて、雪の愚劍の上よも、寝るのがせめて女房の役氣の張詰ても此  
 瘧の重るよ付て、二人の身よ、勞れの病が起りのせぬか、萬一悲しひ便  
 やなど聞たら、何とせふぞいのふ頼上るゝ觀音様、弟夫の武運長久我子



の命息災延命未練な事じやが私も此子を夫よ渡す迄に生て居たい死  
 ともないど傍よ夫の有ぞとも知ぬ不便さ喰まへる喉よ熱湯内外よ水  
 火の責苦雪みぞれ子を濡じと抱えめく天道哀白雪の積り重る旅勞  
 れ瘧と寒氣よとぢられてると一聲氣を失ひどうと倒れし物音の肝よ  
 こたへて南無阿彌陀なむみだ佛も口の内今の何ぞと主の母戸を  
 引明ればばつたりと身の濡鷲の目いどみたりこりや眩暈がきたのじ  
 やいのの、ま、いぢらしやどうせうぞ夫よ幸此氣付と、つかの文庫よ用  
 意の藥、すそりやは無用よなされませなせよいの、こりや親仁殿の道  
 中で持えやつた結構な氣付、其結構な氣付を非人同前の者よ吞して、  
 それでも氣の付ぬ時の、かすり合よ成ますぞへ此儘よしてほり出して、  
 お仕廻なされませ、まやといふてどふ見捨よ成物、可愛や乳を授して  
 泣わいの、せめて此子を殺さぬ様よ奥の火燵で燠て遣ませう、風よ當じ

と寝巻の編絆わか他人の慈悲深く比翼とかのす女房をむがり引出  
 し戸を引立奥口見廻しさし足し、勝手の見置釜の前付木の明り見咎め  
 て、人の何どかいひ柴を、そつと隠して門の口伏たる妻よ氣を付る柴の  
 焚火の燠り噛まめる齒を割割て、雪よ濡す氣付の一滴耳よ口寄聲かす  
 め、お谷といふも憚りて心の内で呼生る夫の誠通じてや、うんと一聲氣  
 が付たか、女房、政右衛門殿かいのど、いふを押へて、何よも云  
 な、敵の有家手がしりよ取付たぞ、此屋の内へ身共が本名けふらいでも  
 知されぬ大事の所、そちが居て、大望の妨苦しく共こたへて一丁南の  
 辻堂迄、遣ふてなり共行てくれい、吉左右を知す迄、氣をまつかりと張詰  
 て必死るな、早ふ行くと、夫の詞は千人力、觀音様の御引合せ、お前よ  
 逢た、人參熊膽、忝い、がぼんのどこへ氣遣ひすな、坊主の奥で寝  
 さして置た、ソレく向ふへくる提燈見付られな早ふくとせり立れど、此



年月の悲しさと嬉しさとてふじて足立す杖を力と立兼るとやせんかたへは脱捨し薦又積りし雪の儘若せて人目をくらき夜をほかく戻る達者親仁、お歸りなされましたか、庄太郎寒い門は何して居るお歸りが遅い故、お迎ひよ出かける所、迎ひよ及べぬ、こりや門口の柴の燃さし、非人共が業で有、不用心など見廻す提燈、私がと取拍子のごとばつたり、鹿相だんない、きつい風です、道で取られふと仕た、まだもゑい所で火が消たといふもこたへる統持足天氣も大方上り回庭から足ふく下駄直す師匠思ひよ機嫌顔、馴染程結構な物ない、是から緩りと夜と共咄そふ彌最前頼んだ事違變のさいの、是にお師匠共登へぬくといお尋、心元かふ思し召ならなまくらでない魂を、只今金打、何のそれよ及ぶ事、及べぬとおつしやつても、お頼なさる、本人の股五郎殿の有家は存じないとおつえやる、お師匠の詞は鞘が有

らふかど存じられ頼まれるよ力がない、左様ぞやござりませぬかと、探る心の奥方女房稚子抱走り出、親仁殿最前行倒れの順禮が抱て居た此乳香子、今肌を明て見れば守りの中よ此書付、和州郡山唐木政右衛門子、巳之助と書て有わいの、よと幸兵衛立寄て誠よく、よい物が手よ入たぞ、敵の駒を人質と取て置、此方よ六分の強み、敵よ八分の弱み有、股五郎殿の運の強さ、其がき随分大事よかけ、乳母を取て育るが計畧の奥の手と悦勇め、政右衛門すつと寄て稚子引寄、喉ぶへ貫く小柄の切先幸兵衛驚き、庄太郎、大事の人質なせ殺した、此駒を留置敵の鋒先をくじかふと思し召、先生の思案、お年のかげんかこりやちと燃が戻りました、武士と武士との曠業よ、人質取て勝負する比怯者ど、後ち後ち迄人の嘲り笑ひ草、少分ながら股五郎殿の、お力よ成此庄太郎、人質を便りよ仕らぬ、目さす相人政右衛門とやら云やつ、其片われの此小



駒血祭こまけも差殺さしかしたたが頼たのまれた拙者せつしやが金打かねうちと死骸しがいを庭にわへ、投捨なげすてたり、幸兵衛さうべゑ手を打うつ、尤なほ其丈夫たまたしひな魂たましひを見届みとたれば、何なにをか隠かくそふ股五郎またごろうの奥おくへ来て居ゐるのいの、祖母おば御殿ごんを起おこしておじや、こゝ股五郎またごろうの片腕かたうでも成頼なりゆきしい人が来たきたといふて爰こゝへ呼よんでおじや、澤井さわい股五郎またごろう殿どのの此内こゝも居ゐさつしやるか、外ほかも連つれの衆しゆでもござるかな、いづく供とももなしたつた一人ひとり、奥底おくそこなふ咄はなしてたもと打明うちあけ語るの思おもふつば、何條なにぢやう知したる股五郎またごろう、手取てとりするの安やすかりなんと、手てぐすね引ひて待大膽まうだん、志津馬しづまの女房にやぼうが案内あんないも股五郎またごろうが片腕かたうでとの何なにやつなり共とも只ひと一討ひとうちと鯉こい口くちくつろげ居合ゐあ腰氣こしき配ばいり目配めばいり互たがひよきつと、こなたなり、一度いちどの仰天おやうてん、幸兵衛さうべゑむんすと、居直ゐちよくり、唐木政からぎまさ右衛門ゑもん和田志津馬わだしづま不思議ふしぎの對面たいめん満足まんぞくで有あり、先まづがけられし二人ふたりを思おもひがけなき女房にやぼうが心こゝろとぎまさ不審ふしん顔かほ、老人らうじんの目利めりよもや違ちがひのせま、いがの、今宵こんや澤井さわい股五郎またごろうと名乗なをり来る年としの格好かっこう、聞及きかびしと、抜群はくぐんの相ま

遅扱おそくの返かへつて付つねらふ志津馬しづまか、但ただし餘類よるいの者ものか、肌救はだぬるさせて詮議せんぎせん、と、わざと一ひとばい喰くた顔かほ、三寸さんすん組板くみたか見みぬいたれど我弟子わがでしの庄太郎しやうたろうが政右衛門まさゑもんと云事いふことを、知したの漸あやたつた今いま、骨柄こつがらといひ手練てねんといひ、適股五郎あつたごろうが片腕かたうでもせん物ものと頼たのめ、早速さつそく承知しょうち仕しながら、股五郎またごろうが有家ありかを根ねを押おして聞きたがるの心得こころえずと思おもひしが、子こを一ひとゑぐり、差殺さしかし、立派りつぱも云放いふはなした目の内うちも、一滴いつてつ浮うむ涙なみだの色いろ、隠かくしても隠かくされぬ肉身にくみの恩愛おんあいも始はじめて、悟さとりしほど、澤井さわいもさせる恩おんのなけれど、娘むすめお袖そでを、城五郎しろごろう方かたへ奉公ほうこうも遣やつた時筋ときすぢ目有めあり人の娘むすめ、末すえく、我一家わがいけの股五郎またごろうと娶めと合せん、いかもか頼たのずと、つい云いた一言いちげんが、今更いまさら引ひぬ因果いんぐわの縁えん、其後そのち娘むすめの奉公ほうこう引ひて歸かへりしが、と、今いま落目おちめも成なた股五郎またごろう、見放みはなされぬ侍さむらいの義理ぎり、かくまふ幸兵衛さうべゑねらふの我弟子わがでし、悪人あくにんも組くみしてくれど頼たのめ引ひれず、現在げんざい我子わがこを一ひと思おもひも殺ころしたの、劍術けんじゆつ無双むさうの政右衛門まさゑもん、手てほどの此こゝ師匠しせうへの云い譯わけ去さとて、過分くわぶんなぞ



や其志も感入、敵の肩持片意地も最早是切只の百姓町人も侍も替らぬ物の子の可愛さこそたの男のあきらめも有、最前ちらりと思ひ合す、順禮の母親の心が察しやらるゝと悔め、門またへ兼てわつと泣聲内かも明か戸直まらるび入、あへ亡骸を抱き上、コレ已之助物云てたもかしやのいのく、夕べ迄も今朝迄も、ういつらい其中もてうち仕たり、蒸づくし、爺はよよふ似た顔見せて自慢せふと、樂んだ物逢と共、儘差殺す、むごたらしいと、様を恨るも恨られぬ、前生もそんな罪をして侍の子より生れしぞ、こんな事あらさつきの時母が死だら憂目の見まい、佛のお慈悲の有ならバ今一度生返り乳房を吸てくれよかしと、庭も轉びつ還廻り抱まめたる我が身も雪と消べき風情なり、志津馬涙押拭ひ此上の包ん様なし、迎もの事、眞實の敵の有所を、何が扱、此方も隠し、せぬ有様、此幸兵衛、最前庄屋へ呼れた時、股五郎も逢て来た、ヤすりや

敵の庄屋の方より心得たりとかけ出すを、政右衛門引と、め思、我も爰も有と聞て、暫時も此地も足を留ふ様がない、はや五六里も行過ても、爰も敵の居ぬ、此行先も用心して、海道筋へのよも行まい、道をかへて落たと見へる親仁様、何と左様でござらふがな、またり黒星其通り、迎も非道の股五郎、天道の罰よて、どうで討るゝ者なれ共、此岡崎で勝負さすれば、肩持ねばならぬ幸兵衛、藥師堂の山越も中仙道へ落した、城五郎へ一旦の情、股五郎との縁も是迄、思ひぬ、方便が縁も成、志津馬殿と言かひした、娘が身の果不便やと見れば、籬の小影も、思ひ切、髪墨染のけさよかひりしそぎ、尼姿お袖かき、出かえやつた、悪人の股五郎も、飯も女房と名の付た、其間違がそなたの不運可愛や、盛り黒髪を、アコレ、もう何よりもやませぬ、顔の見ね共、云號の男持のがうるさく、屋敷を戻つた、其時から、尼も成氣で、袈裟衣、けふ一日も氣が替、染違ふたる、鎖漿付を元の



白齒と墨染も染直ても脱しても思ひ初た煩惱の心が元佛様は救されてと身を背泣ぬ氣を泣親心股五郎も志津馬も縁を離れたお袖道心袖振合も他生の縁子も別れた順禮も菩提の爲のよい道連關役人の我娘關所くも切手いらす中仙道への案内者勝手も連て行れよと娘も敵の道引を道子故も踏迷ふ未來の契り鉦撞木涙で渡す父母の惠も深き觀世音なむあみだ佛なむあみだ我子の冥途の道まるべ志津馬唐木も耻合ふてまはれぬ表武士の禮師弟の内證敵同士此儘歸るの比怯者返せと一聲切付る得たりと請る半蓋も馬士の胴切重切まつ其通りの手柄を待まだお手の内狂ひませぬ、やがて吉左右くと笑ふて、いわふ出立の侍なりけり

○第九 伏見の段

男共く、胴の間へお蒲團の入たかな、船の間四人様水菜の爰は

置まする、船頭衆此荷物破物じやぞ、氣を付て貰ふと世話素焼の土産物積を早く押出して、舟を見送り機嫌よふお下りなされとそこく、夕日程なく吳竹の伏見の里の船着場軒をならべし舟宿の客も絶間もなかりけり世の憂を何と志津馬の爰かして敵の行衛尋ね兼心氣勞れて眼病をいたる瀬川も諸共も暫しの爰もやどりして、北國屋が奥二階手を引連てそろくと、梯子を折しも黄昏の人なき隙を幸と送り見廻し、志津馬様二階計も氣詰り月の夜すがの川氣色見やしやんすのが目の養生と介抱如才撫さする心遣ひぞわりなけれ、何ぼふ養生してもはかしくしうもない眼病見かけも替りなけれ、けふ此比の此様もそなたの顔さへわかり兼ね、ふらく月日を過す中、主人上杉公急病にて御死去遊されし由は存生の中も敵も討ぬ残念願ふ思ふ政右衛門殿武助諸共引別れ大坂へござつた故此伏見も逗留す



るも若や敵の、是はしたり思はず知ず大きな聲で、誰も開て居  
 なんだかと、蓋も心奥口へ開へ憚り差寄てひそく、咄す店先へ志津  
 馬、又連て孫八が忍ぶ姿の按摩取頭巾すつぽり船着の宿屋、の門日  
 から、按摩よござい、孫八殿、瀨川夜、去どの物覺への悪い、我等按摩  
 取の勘兵衛、必鹿相をつしやるなど、云つゝ差寄小聲、成若旦那のお供  
 仕て、二三日以前から此伏見、逗留して思ひ付た按摩、毎日々此  
 船宿入込で氣を付れど、是れと申様な手がしりもござりませぬ、  
 夫のそふと若旦那ちとお目のよふござりますか、孫八の心遣ひ忘れ  
 のせぬ某、此程より歩行ならず、出入の旅人、心を付て、親へ共敵  
 の行衛知ざる故、次第も重る眼病の口おしさよと計りて、打しほるれ、  
 お道理と、瀨川も涙孫八も、俱も目をすり居たりしが、去迎のお氣の弱  
 い、何の神佛様がないよこそ、天道が正直なれば、孝行な心が届て、御

本腹も本望も今の中でござりませよ、其様と思存の養生の大毒、毒の  
 次手、瀨川様、兎角病人は介抱が大事、お如才有まいけれど、お若い同士、  
 何よりか、よりお持合せの彼毒忌が肝心でござります、是から上手  
 の宿屋を廻つて、後程お見舞ませうと、云つゝ立て、表口出るが早く聲  
 張上、按摩、疥癬、鍼の療治と、視隣の八百屋の店、奥の間、かゝと出る  
 の、櫻田林左衛門、旅勞れで、殊の外頭痛がする、幸の導引、一つ頼もふか  
 い、左様なら、お座敷へ、表を見るも、又氣ばらし、苦しうない、爰で  
 爰で、成程それもよふござりませよ、旦那、免なされませと、庭から直  
 店の間へ上る、孫八、櫻田も互、夫と而體を、知ね、何の氣も付ず、療  
 治人、身の随分、ついが好遠慮、お柔でくりやれ、さつう凝てござ  
 りませ、そふして、見受ました所が、歴々、骨組と、丈夫な、産れ、嘸  
 お力も強かるな、兵法とやら、劍術とやらも、定て、抜て、ござる、若や有な、



我達が目もそふ見ゆるの尤も天が下廣しといへ共某も立合ん者の  
 恐らく覺へない成程左様も見へまするそふしてあなたのお國の何  
 國でどつちへか出あされますと身共の西國方の者成が智謀劍術勝れ  
 し故高木風も倒るゝ習ひも傍輩の讒もよつて浪人して長く漂泊  
 せしが身共程の達人があらぬの國の弱と有て此度歸參を仰付られ  
 先知の上も過分の加増古郷へ歸る曠の道中數多有供廻りの別宿も  
 扣へおれば跡荷物の揃ひ次第明晝船まで下る積り口から出次第潜  
 上を隣の店も漏開志津馬瀬川あれを聞きや同じ武士の身の上でも  
 衰へると盛ふるは是程も違ふ者か心を盡して尋搜す敵も廻り逢  
 ず困窮の上此眼病よつく武運も盡たかど悔も瀬川も俱涙ほんと思へ  
 ばおいとしや沼津でお別れすてよりお跡をえたい尋ね逢かいら長し  
 い日の立ど是ぞと思ふ手がしりもないを苦よして此様はほん悲し

い病目を傍で見ると目の私が心推量して下さんせとかち歎くをこな  
 たよの聞耳立る櫻田が兩耳びつしやり何とする放さぬかやい  
 お前様も辛抱のない斯致して引さげねばお頭痛が直りませぬ  
 仰山な按摩ださ何といふ流じやぞいは南蠻流の隣の今宮流で  
 ござります、聞へたそれで雙するのじやな、瀬川したか其様  
 案じてたもんな此宿の亭主が引合せで隣も逗留してござる眼醫者  
 竹中贅宅老の加減の薬湯せんも立て洗てたもいと云つしかい立て勝  
 手へ入て汲で出る夫も盡す貞節の心の清き清水焼白湯も振出し差出  
 せば始終開居る林左衛門詞の五音心得すと延上つて差覗くをちやつ  
 と兩手でめんなない千鳥、何とする目が見へぬいやい又是も  
 今宮流か、斯致して置まして一時も手を放すと何とお目がはつ  
 きりと成てよござりまじよがな是を名付て天照太神天の岩戸開きと



申す、何を馬鹿赤とを、考たが氣作な按摩取、そちが名、何と云ぞ、  
 私、板屋勘兵衛と申して、此間大坂から登ました、おなたもお下り  
 なされたら、外を差置芝居へお出なされるで有、面白い事でござります、  
 則爰、持ておりますが、役者の番附、お慰まはらうと申せ、是が役  
 者の番附、大坂土産、何を貰た、役者の番附、日傘でござります、  
 日傘、日傘、そちが、仮名の板屋の勘兵衛、板勘兵衛、板勘兵衛、  
 是からお下をやりませよ、が横にお成なされませぬか、下の療治の  
 後程、頼料物も一所よくくれ、中、氣作な男め、故長旅の鬱氣を散じた、  
 さらば、是から夕飯の宿屋の知行、有付、勘兵衛後、と櫻田の刀引さ  
 げ立上り、一間へ入、孫八の上の町へと急ぎ、行道摺違ふていつこかの、  
 飛脚と見へて、門口から、どなたぞ頼ませせう、是のお客、林新五様へ大  
 坂からの此状と、開、志津馬の覺への替名、是、則拙者、林新五、直

ちきよ、請取ました、お返事をなされるなら、追付取、参りませよと、云  
 捨飛脚の立歸る、瀬川、唐木殿、此書状、何事じや讀でたも、早ふ、  
 封じめ解、登束ながら、押開く、襖の内、林左衛門、差足、拔足、表口、戸脇、  
 隠れて、立開、共心付ね、扱も、政右衛門様の、お氣の付た、私でも、讀る様  
 又、仮名交りの、此手紙、彌、無事と存じ、然れば、敵の、落足、止め、爲  
 大坂川口の、出口、門弟、共、數多、付置、油、斷なく、手當、致し、我等、事、武  
 助、諸共、尼が、崎、兵庫の、邊り、又、待受、間、其地、よて、替り、し、事、も、座、い、  
 早速、知らせ、下さるべく、い、此由、申、入、度、早、以上、政右衛門、殿、の、大  
 坂を、立て、兵庫の、邊り、へ、参られ、しか、此方、も、委細、の、譯、返、書、又、委、しく、申  
 送らん、瀬川、爰、の、端、近、奥、の間、で、太、義、な、が、ら、書、て、た、も、飛脚、の、來、ぬ、中、  
 早ふ、と、瀬川、の、夫、の、手、を、引、連、這、入、後、か、げ、と、つく、と、窺、ひ、扱、こ、そ、く、和  
 田、志、津、馬、と、相、違、な、し、踏、込、で、討、放、そ、ふ、か、い、か、が、い、せ、ん、と、と、置、つ、思



案半へひよつかく一僕さへも内證の薄いを黒める木綿の居士衣、見  
 るから敷井の竹中贅宅療治仕廻ふて戻り足夫と見るも、是は隣  
 座敷のお侍様、端近よござりませすな、昨晚ちよつと以意得ずた贅宅  
 老、是へくと片脇へ招き寄て聲をひそめ、今朝もやごとく隣家よ逗留  
 致して居る若侍が、眼病、貴殿が療治召るよ付折入て頼し密事彌は  
 承知下さるよや、大身のおきた様のお頼、お禮物さへ慥あらば、先  
 過分、然らば打明お咄しや、子細有て某始め、別宿よ逗留致す、組の者共へ  
 仇有やつと、夜前も心を付るよ、身共が推量ちつ共違はず、彼が實名知た  
 る上の討て捨んと思へ共、彼者よ力を添る、劍術無双の曲者有故、我  
 が手よかくる時の返て、此身の有所も知、帯紐解て夜が寐れず、頼と云  
 の愛の事何卒貴公の働さよて毒薬を薬と偽り、さやつが眼の見へぬ様  
 よ何と手段の有まいか、此事成就致しなば一廉お禮を仕らふ、先頼の印

と懐中、金子の包取出し些少ながらと手よ渡せば、金子五十兩、結  
 搦なぬ印しやな隣の病人治したとて高く、貳朱かよふくれて百疋の  
 覺束ない、ほんの是が牛を馬よ乗かへたとす物、後共云すたつた今、我等  
 が秘方の毒薬と差が相圖よ兩眼、五臟へ染込腐り薬ちやくと用意致  
 して置た、刀いらすよ仕廻ふて取り、此贅宅か手の中よ有、早速の得  
 心満足致た、必手ぬかりなき様よ、お氣遣ひなされますな、生す覺  
 ひなければ共殺す事ならこちが得物、委細のあれから覽じませ、いかよ  
 もよきよと打點頭えめし合して店の間の障子引立、窺ふ櫻田、何でも玄  
 めたと贅宅が物よ懸りの掴み頬上へよ見せぬ塗骨の扇ばち、隣の  
 店、贅宅でござる、は見舞やすと聲よ志津馬の一間を出、是は苦勞千  
 万、扱お歸りを待兼せした、そふでござらふ晝からお見舞や筈が、は存  
 じの流行醫者あそこからも竹中、愛からも贅宅様、生薬師じやと持囃し



て漸おそ只今罷歸さかりかへつた何なにと其そのの洗あらひ藥くすりでさつぱりとよからうがの、さして替かつた事も、めんよふな、藥くすりでよい筈はずじやが、今いま一度見まて進すすぜふと、行あん燈とう引ひ寄よ灯とう明ありよ、ためつすがめつすかし見て、内障うちせき立たじやないの、是こゝなら洗あら藥くすりでい行あんぬ筈はず、取とて置おの差さ藥くすりを、出ださすの成なまい、大切な藥くすりじや程ほどもうつかりと思おもしやんかや、氣遣きづかひ召めるな、今いまの間まは本腹ほんぶさして進すすせふと、こてく取出とす藥箱くすりばこ、是こゝのよいお方かたよ、かすり合あして拙者せつしやが仕し合せ、此こゝの禮れいの本望ほんぼうを、追付おしづ本腹ほんぶ致いたしたら急度きうど致いたすでござりままよ、心遣こゝろづかひさつしやるな、醫道いどうの仁術じんじゆつ人を救すくふの醫者いしやの役やくぢや、まもそつとこちへ寄よつしやれど、片手かたては匪はい押明おしあて、救すくふ件くだんの毒藥どくやくの直ちよくは志津馬しづまが命いのちを斷た七ななの刃やいば金の差さ藥くすり、忽たちま毒氣どくき廻まると見みへ、きつふ此目こゝろが、痛いた筈はず、まゆむかまゆむで有あがの、少すこしの間まぢや、こらへさつしやれ藥くすりめんけんせざる時とき、其病そのびやう治ちせずとすて、一旦助たすかねば藥くすりのさかぬ追付おしづ兩眼らうがん明あらかま

此生藥師こゝろやくしが治ちして進すすせる、其間そのま一ひとぶく致いたさふと、煙管えんくわん取と上あすつぱく、すつぱのこつてう、納なた頼たの付づ志津馬しづまの苦痛くるうたへがたく、すく是迄こゝの藥くすりとの違ちがふて、五臟ござう迄いたも染渡せんわり、いかふ苦しうござりますと、聲こゑは瀬川せがわも走り出はしり、若わふ藥くすりの違ちがひはせぬか、お心こゝろ遣づか、持もちやんせと一方ひとかたならぬ介抱かいほうも、じろりと詠えい、うつり共ともめ、今いま藥くすりじやといふて差さたのは、我が目めを潰つぶさふ計けい、かれが秘方ひみつの毒藥どくやくじやいやい、くそんなら今いまの毒どくで有あるか、何なに意趣いしゆ有あて此仕業こゝろわざ、様子ようすが有あふ様子ようすの、立た上あれ共ともよろ、瀬川せがわとこゝに居ゐる、瀬川せがわ爰こゝが苦し、く、せつないはいのと夫おとの惱なやむを見る悲かなしさ、有あるもあられず、起たり付づ、そんならお目めがもふ見みへぬか、胸むね欲ほ醫者いしやの鬼おにめ、魔王まおうめ、すたく、刻ときでも恨うらみはれぬとまがみ付つ小腕こでん取とり、膝ひざ引ひ敷し、く、たくと刻とき廻まりても、もふ叶かなぬ、中ちゆう隣りんのお客きやく、何なにと拙者せつしやが、加減かへんを、とくと是こゝは、見届みとたりと物影ものかげ、林はやし左衛門ざゑもんまたり顔かほも歩あみ出で、和田



行家が駒同苗志津馬無念よ有ふな某を和田志津馬と知たこなたの  
 澤井股五郎よ力を添る伯父の櫻田林左衛門其方連が股五郎を討ん  
 などし及べぬ事と聞方扱いと遣寄く敵の片われ遁さじと刀の柄  
 よ手をかくるを襟がみ掴んでぐつと捨付テ劔術無双の此櫻田よ刀向  
 んんとこのさかしい蚊とんぼ侍捨り殺すの安けれど某始め股五郎が  
 有家を知れての一大事と贅宅よ申合せし身が計畧眼も見へぬ分際で  
 も見事親の敵を討か相人の大敵其上よ城五郎殿のお心付よて劔術勝  
 れし侍數多付添ふ股五郎所詮叶ぬ事だどあきらめ首でもくすつて  
 くだべれど悪口雜言脚よかけ踏付られて無念の齒ざり侍の有まじ  
 い比怯未練の此仕業親の敵の股五郎よ縁を引たる其方が土足よかけ  
 られ手向もならぬ此目が見へぬからテ口惜や無念やと拳を握り男  
 泣見るよ瀬川が氣の狂亂目かいても見へぬ志津馬様よむごいつらい大

悪人天道様の明らかなお目よの是がかくらぬか孫八殿の何してぞ神  
 も佛も恨しやと聲を限りよ泣叫ぶやかまじいわい〜眼の見へ  
 ぬ計じやない毒氣が五臟へ廻るが最期追付ころり百兩の褒美がはし  
 さの仕事じやわいやい贅宅が働きよて此志津馬めを仕廻ふて取待  
 伏ひろく政右衛門め鼻明すのがこつちの方便荷物の内よ忍ませ置し  
 股五郎も落付せうぬらが苦痛を看よして一献汲ふよいさまで踏  
 飛しかけ行鑑をまつかと取すりや差敵の股五郎の身共と一所よ昨  
 日は是よ逗留致し居るのいよ忝い今こそ敵の有所が知た志津馬様嘸  
 は本望とぬつと出る池添孫八主従一度よ身繕ふヨク儂眼が見へる  
 な贅宅こりやどふじややい目醫者と成て入込し此贅宅が本名の孫  
 八が兄池添孫六志津馬様と云合せ明らかかな兩眼を目病と偽り儂が俗  
 性敵の行衛を知らぬ首尾よふ参つた櫻田殿と云れて恟り股五郎



を見出さん爲云合せで有たよな此上の一味の者へ告知せんとかけ出る敵のかとよ人逃さじと拔手も見せず主従が勵しき手練の働きよさしもの櫻田叶のじと旅宿をさして逃込たり、さいつく迄もと孫八志津馬欠入んとする奥の間々、どつこいならぬと呉服屋十兵衛かけ隔てさゆるを血氣の志津馬が切先、肩先すつぱり切下られうんと倒るゝ其隙、奥を目かけて欠入を、斬くと聲をかけ濱邊、つなごし苦舟、船装束を其儘、武介引連政右衛門、まづと歩み出、手よ入た敵なれ共、爰での討れぬ子細有町人ながら義心有十兵衛が此深手非道、よ組せし先非を悔、志津馬が手よかくりし、本望あらんと有ければ、手負のむつくと起上り、推量の上、我所存、今更くと、やよ及ばず、股五郎始め一味の者共、西國へ落失て、は本望の妨と、政右工門様の計略、よて最前の似せ飛脚を、誠と心得裏道を、小倉堤を伊賀越、志州島羽の港、

大廻しよて九州相良へ落失んとの云合を、お知せずて相果るが、志津馬様へのせめての寸志、町人なれ共、敵の端くれ、股五郎と頼れた、一つの命を兩方へ、わけて願ひ、此上ながら、瀬川が事、政右衛門が、刀よかけて志津馬よ添す、武士の鑑の政右衛門様、其は一言、呉服屋が冥途の晴着、片時も早くぼつ付て、此年月の、は本望、はやくと氣をいらつ、手負よ取付妹が、歎くを制して、政右衛門、いかよもぼつ付討留ん、我掌の内よ有と、志津馬が亡君上杉殿の、は家門たる、畠山政家公、さへ置れし、宇内公の石碑有伊賀路、よわいて本望達する物なら、泉下よまします、顯定公、行家殿への、追善ならん、譬何百何十人、彼よ力を添る共、天理よ背敵の介太刀、何條、恐るゝ事有じ、時の初更の、戌の刻、先へ廻つて伊賀越、多年の本望、今此時と唐木、が諫よ力足、手負を跡よ三つ瀬川、三途の瀬よみ、敵の魁さら、くを夜嵐よ聲吹分る、海道筋跡を、またよて、一急



ぎ行

○第十 敵討の段

されば唐木政右衛門股五郎を付出し、夜を日と繼いで伏見を出伊賀の上野と心ざし先へ廻りて代官所の届けも濟て北谷の四つ辻と主従四人我劣らじと入来る、政右衛門聲をかけ孫八武助の我と構はず志津馬をかこい、我兼て聞及ぶ、股五郎の付人有由、目ざす敵の只一人、警助太刀何十人有迎も、何程の事あらん最早来るも問も有まじ、身拵へをどせいすれば、志津馬のけふを一世の晴業、心得たりと片はだ抜は南蠻鎧の差込と鎖り鉢巻拜領の不動國行覺への名作、同唐木も立附と澁の鉢巻信國のねた刃の兼て合詞、いづれ劣らぬ古今の勇士池添石留引添て、日頃の念願さす敵を今や來ると待かけたり、程も有せず、股五郎悪黨原も前後をかこいせ、一番手の林左衛門、さめき渡り我一と、小田町筋へと打

通る、斯と見るを和田志津馬小影を飛で出、向ふと立て大音上、いかも澤井股五郎汝が手よかけし和田行家か一子同苗志津馬、此所と待受たり尋常と勝負せよと聲かくれば、政右衛門、久しや櫻田林左衛門、郡山よて真劍の勝負を望し其方今日と至つたり、覺悟せよと呼つたり心得たりと林左衛門馬上を飛下るを走りかすつて、政右衛門、鎧を肩先かけて切付たり、遁など聲よ、一流を得し附人共志津馬を目當切かくる、心得たりと池添石留四人を相手と切結ぶ、股五郎志津馬の一騎打兼て手練の和田志津馬、爰と顯れ彼所と切抜飛鳥の如き早業、股五郎もあしらい兼突かける鎧先を、鏑せり、請留られ、跡退り、成てたぢくたぢ、坂の下へと引て行、この心へすと圓四郎、股五郎を救はんと勢ひ込でかけ行所へ、どつこいやらぬと政右衛門、仁王立よつと立たり、邪魔ひちぐなと打かくる、心得たりと、受流し付込所を身をひらき飛よと見



へしが團四郎、から竹割は切伏たり、返す刀は助太刀共一人も残らず、  
 くい切、志津馬が身の上氣遣しと、二人の家來を跡まなし坂の下へと飛  
 で行、孫八武助の死物狂ひ、殘多の付人相人、取切つ切れつ、戦ひしが、數  
 个所の手疵、目も眩み同じ枕、死してけり、股五郎相人、和田志津馬  
 手利と手利の晴勝負、いづれ抜目のあき所へ、政右衛門が韋駄天走り、助  
 太刀の奴原は一人も残らず討留しを、殘るのをやつ只一人、踏込て討  
 留いと聲の助太刀百人力よろめく所を付入て、肩先さつぶと切付たり、  
 こは叶はじと股五郎死物狂いと、働け共働せぬ、武士の太刀風、さしも  
 の澤井も切立られ、まどろみ成を疊かけ、突き一刀、大地へとつさり、起し  
 も立す乗かすり、年來の父の敵、主人の仇、一度も晴る胸の月、空よ  
 知れし上杉の家の、嬰れと悦ぶ唐木、武名の世よ、鳴ひいく、和田が手疵  
 も日を追て、願て全部十冊物此上もなき敵討、今も譽れを、殘しける

天明三癸卯年四月廿七日

伊賀越道中雙六終



明治廿四年十月七日印刷  
明治廿四年十月廿二日出版

發行兼  
刻者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發兌

日本橋區通四丁目四番地

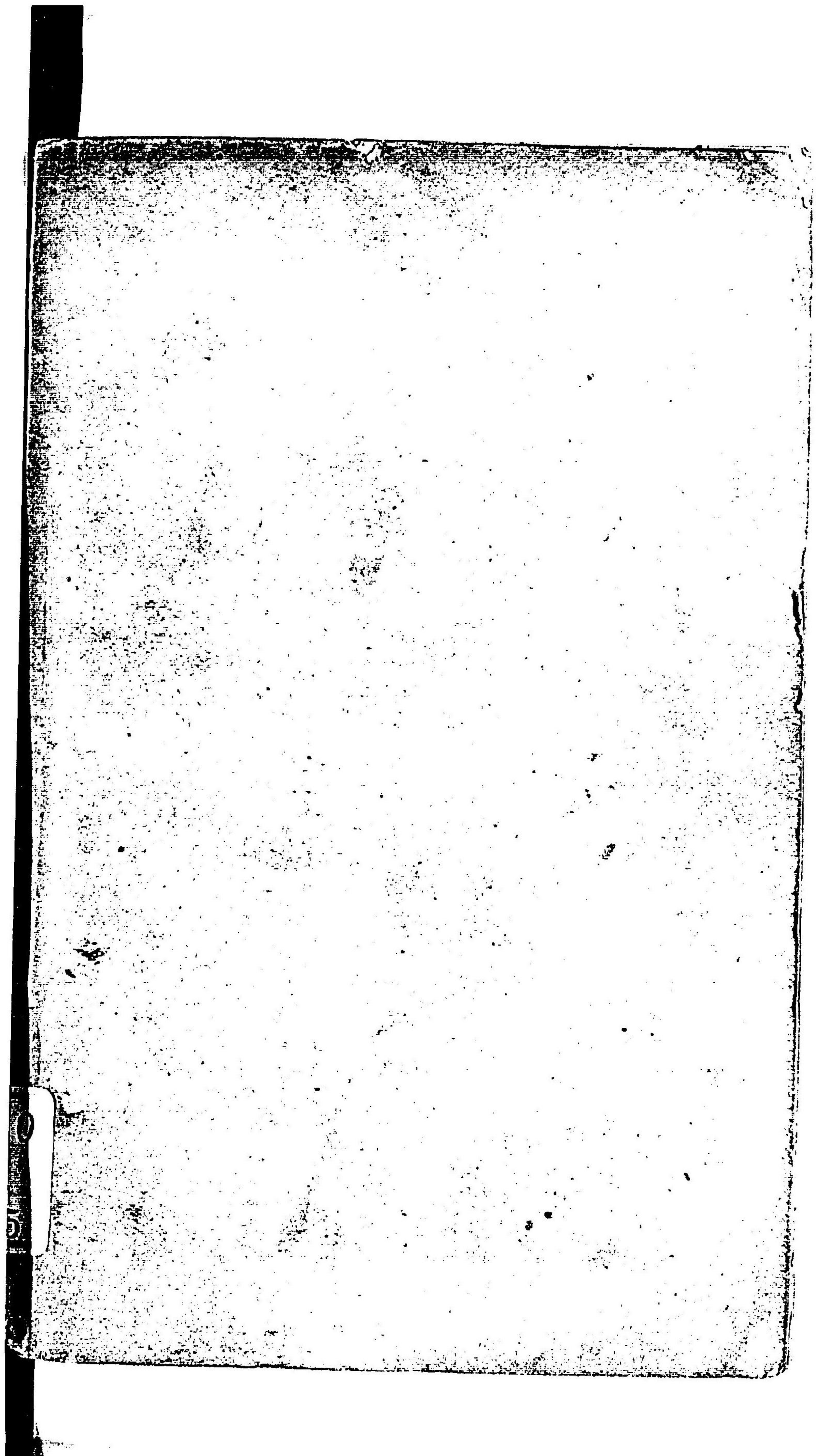
金櫻堂

26

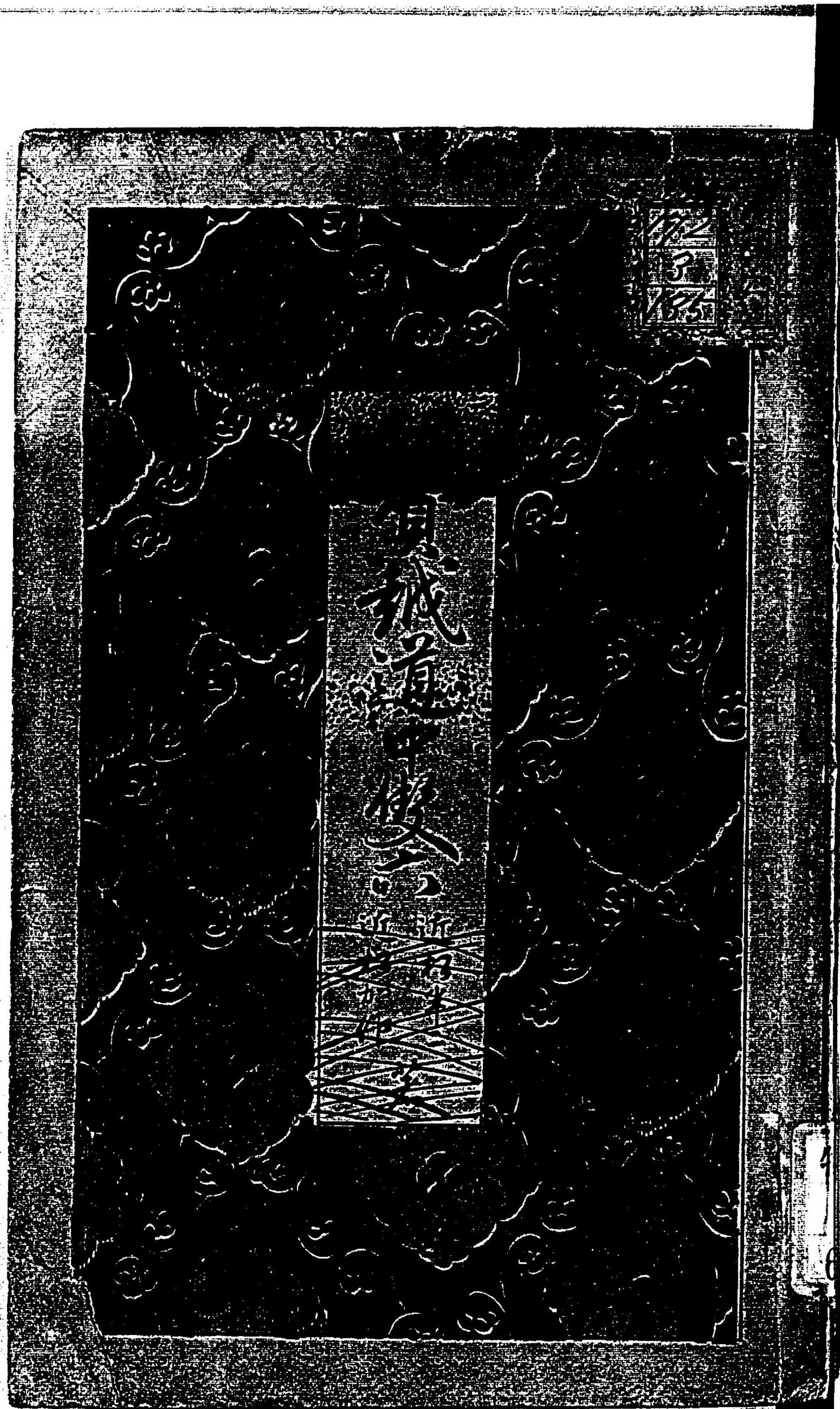
1

125









088180-000-7

特10-605

伊賀越道中雙六

近松 半二

近松 加作／著

M24

DBI-0003

